女學雜誌

一册六錢

各土曜日出版

第百七拾三號

當府内無郵税

郵税一錢

Digitized by Google
Original from COLUMBIA UNIVERSITY

雜 女 誌 學

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 173. August 3rd, 1889.

第百七十三號目錄

EDITORIAL:—The Pure Breaze and the Fresh Stream.

LEADING ARTICLE:—Dissolution in the Spiritual World.

CRITICAL NOTES: — "Karamatsu-Misao."

MISCELLANEOUS: — The Ship of State. The Good, the Righteous, the Loyal Subject and the Devoted Son. The Death of the Good and the Burial of the Righteous. Hero-Worship in the Literary World. Small-talk (No. I). Home and Happiness. A Young Man's Answer to a Young Lady's Argument.

DROLLERY.

CHILDREN'S COLUMN.

BIOGRAPHIES:—Chares Dickens I.

NOVELS.

GENERAL NEWS.

社説　清風新流

論説　靈界の危急存亡(星野光太)

批評　南翠外史の唐松操其二(南仙子)

雜録　國舟(しのぶ)○忠臣義子節婦孝子(むらさき)○文學上の英雄崇拜(輕快子)○子は奉ずる所ろなきや○白樂天は何如ん○仁者の非義人の死(みどり)○小言(第一)(ゆかり老)○賤の女君に申上ます(賤の男)○家族と幸福(賤の女)

兒監　わるだくみの二

史傳　チャーレス、デッケンス(其一)

小説　眞才子○あるのん物語(美妙齋主人)

寄書　君僕妾と云ふ文字(巖山人)

開書　演説家及新聞記者先生に申す(さき)

新報　日本の女子教育○北鶴教育○洋行者の土産○更に若しきもの○教育界の旋風○青年の勢力到る所ろにあり○其他十件

片々

外報

WOMEN IN JAPAN.

(1) *It is with pleasure that we report Mrs. Asai's acceptance of the Vice-presidentship of the Temperance Union of Tokyo. The office that she has hitherto held, that of the editor of "The Temperance Magazine," has been offered to Mrs. Tokutomi, but she in turn yielded it to Mrs. Kanaya who, we believe, will prove a valuable acquisition for the Magazine.*

(2) *Great reformers are often poor and seldom make friends among the rich for no other reason than that the former are necessarily dissatisfied with the existing state of things and that the latter are too well satisfied with their circumstances. However those who note the secretary's report in reference to the petition about monogamy will be surprised to see how little money, when nobly expended, has the power to move the mass.*

(3) *It is reported that H. I. M. the Empress is pleased to assume the task of composing seven sonnets a day and to submit them to correction.*

(4) *A committee of six eminent physicians has been ordered the investigation of the world-wide question that at what age shall men and women marry?*

(5) *There are 525 women in Tokyo engaged in obstetrics.*

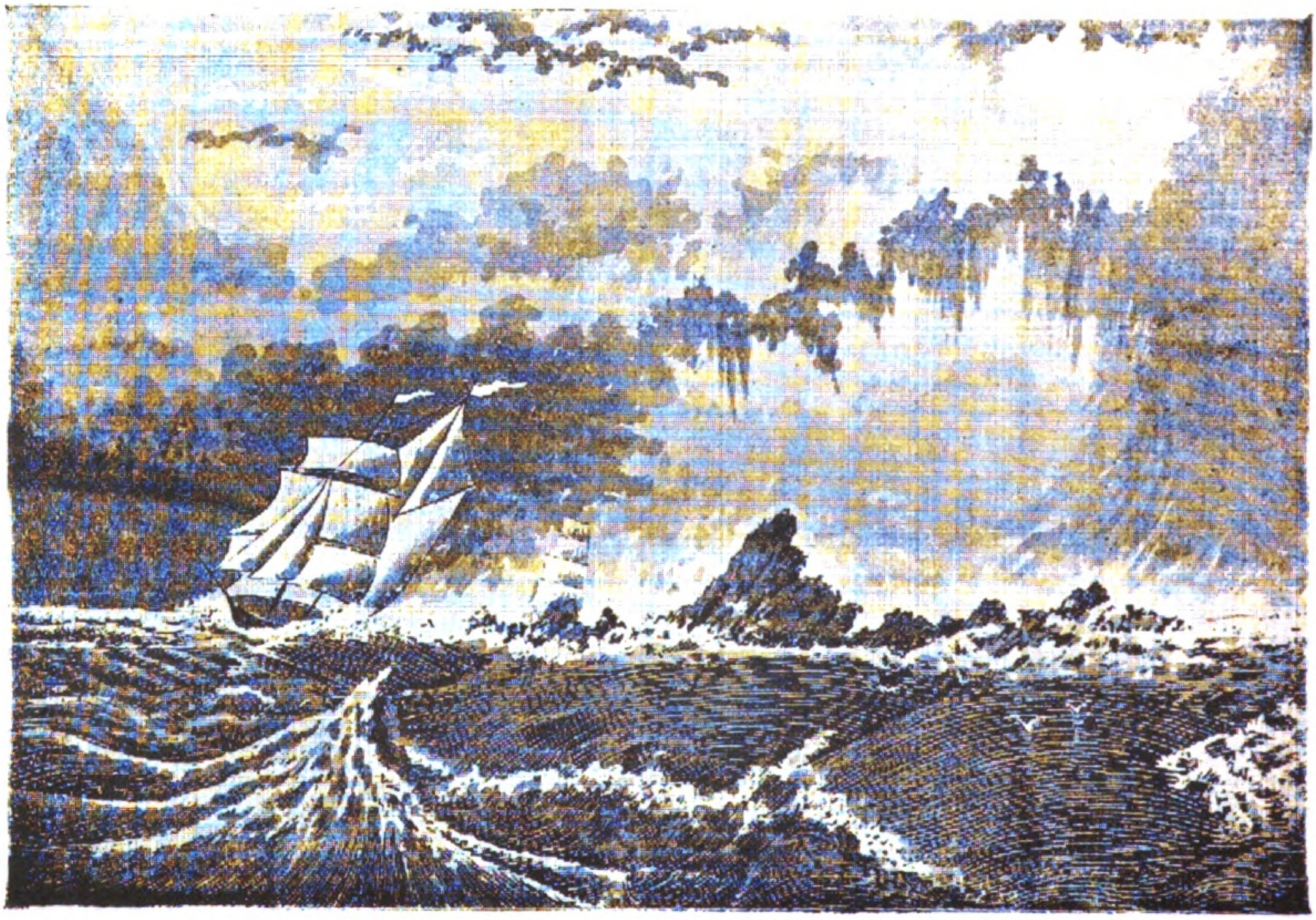
(6) *The Woman's Normal School of Yamanaski Prefecture is intending to make a trip on foot to Kyoto for physical exercise.*

(7) *We correct what has been reported in this column about Miss Ume Tsuda. She has gone to America by order of the Peers' School and not on her own charges.*

Digitized by Google

Original from COLUMBIA UNIVERSITY

雜錄第一篇の圖



Digitized by Google
Original from
COLUMBIA UNIVERSITY

Digitized by Google
Original from
COLUMBIA UNIVERSITY

女學雜誌 第百七十三號 明治二十二年八月三日發兌

社説

○淸風新流

酷暑炎熱の心身を焼く時、都門の空氣殊に濁滞して紅塵一層に重きが如し、此際暫らく常務を棄て百事を忘却して静かに田野山林に遊べば、生氣一來して萬象忽焉變ず。風は清く林頭に起りて遙かに緑野の面てに渡り、泉は高く山巓に發して深く澗渓の響きを役す、快川の流るゝ所ろ巖ほに花を散らし、青山の笑ふ所ろ天に鳥を囀がく、若し夫れ人跡の外に跋渉すれば、深山幽谷の氣神颯々として靈わり、小鳥の吟潔ぎよく、猿猴の聲極めて悲なし、遙かに望むときは天山彷彿、黒岳、墨巓、淡翠、相連接して雲を破ぶつて退ぞく、若し夫れ岸畔波寄する所ろに佇立すれば、漣濤の打寄せ來る時、百雷の踊ろくが如く、其黒砂に徊徊ふ時、白雲の千野を覆ふに似たり、白き帆の鳥の泳げる如く浮沈する處ろ、大艦の黒烟を吐きて波濤を破ぶる處ろ、或は風止み千里硝子を張れる如く、月光紅なゐに映じて萬里の錦きを綴る處ろ、惣べて是れ爽快、新鮮、活潑、異大の感を與へざるとなし。吾人一と度び此の如き風景に接すれば、神氣飄忽として天に昇る、顧みて一身を思へば、吾人すでに昔日の吾人に非ず。

嗚呼之れ何の故ぞや、抑そも都門熱市の間だ樹木山水なく、田野森林に行て初めて之あるに由る乎、曰く然らず。市都の街衢甚はだ密接すと云へども其間固より樹木山水わらざるにあらず、鴨河は優々として西京を繞ぐり、隅川は洋々として東京を横ぎる、彼の叡山上野山は京の東方に茂げり、品海は遙かに房總に接して渺として廣く、嵐山墨陀の櫻花は春映なわにして雪を散ずべし、若し夫れ静閑幽邃なる緑田青野を望まんと欲せば、京地亦固より田舎なきにあらず、市端両なひ稀れにして人朴なる處ろに至れば、茅屋破擔風月の觀に宜ろしく轉たゝ雅致に富まざるにあらず。故に都門熱市の風景必らずしも大いに地方田舎の風景に異なるとなし、山あり、水あり、緑木緑草あり、白花白瓣あり、風あり、鳥あり、吾人何を以て獨り都市に於て更まるとなくして、殊更に田舎森林に行て之を得ると云ふ乎。

蓋し都門に風なきにあらず、時としては砂を捲き家を倒す、然れども其氣甚はだ舊るく久しく濁臭を齎らして絶へて新鮮ならず、都門又水なきにあらず、時としては河に溢れ堤に漲ぎ

り汎濫して人畜を殺ろす、然れども其勢ほひ甚だ緩漫優々として延流し未だ嘗て激衝烈奔せず、都門又山なきにあらず、森岳深く欝丼し三十餘峯遠く連立す、然れども其容甚だ優柔圓頭平斜して突兀奇峻の象あると極めて稀れなり、都門又た樹木なきにあらず、公園には千樹万枝を連らね、路邊悉く青幹を列して夏尚ほ冷なるを覺ゆ、然れども其色甚だ汚がれ緑葉厚く塵芥を蒙むりて生氣既に去る、未だ嘗て森々亭々として奇梢天を穿がつの巨木あるなし、都門又海なきにあらず然れども其波甚だ平らかにして俗舟其上に乘れり、都門又鳥なきにあらず然れども其聲甚だ枯れて昂然新空氣に舞ふの音なし、都門又天なきにあらず然れども雲染まり塵覆ほひ絶えて神聖の相あるとなし、吾人此に於て安んぞ新たなるを得べけんや。

之を以て吾人が時に都門を去りて田舍地方に遊ぶときは、常に神氣一變して精靈の甚だ爽活せるを覺ゆ、而して其の爽快の尤も著るしきは特に暑熱の尤も酷烈なるときにあり、吾人近來間を覗みて箱根山中に僅かに數日の避暑を爲し、此の感尤も切なり。人誰れか自然を愛せざらんや、而して田舍地方の山林は自然の尤も新らしきもの也、都門の士は是れ人の尤も塵に染まりたるもの、所云る甚だ腐敗に近づきやすきもの也、此人にして久しく都門熱市の間だに局促し、去つて彼の山林自然の神氣に接す、其思ひ安んぞ高く清化せらるゝとあらざるを得ん。　思ふに避暑の事たる、近く四五年來に於て大いに行わるゝに至れり、昔しの都門も亦た今日の如く暑かりき、然れども未だ嘗て府民の暑を地方に避けたるとを聞かざりし、而して今日に至りて其の初めて大いに行わるゝを見るは、一に船車の便四方に通じて旅行の事甚だ容易となれるに因る少なからずと云へども、然れども其多くは實に人事の繁劇なると大いに增加したるに因る。人は一日働らくときは一夜の安眠なきを得ず、六日働らくときは一日の安息日なきを得ず、而して其の夜中尤も能く安眠するものは一日尤も能く勞働したるものにして、安息日の甚だ樂しきとを覺ゆるものは實に六日間の業務に熱勉したるもの也、左れば平生尤も多く勉強するものゝ尤も切に安眠安息を要するが如く、人事ます／＼繁劇となり、業務ます／＼窮屈となるに隨つて、其の若干日月の休暇を要すると亦ます／＼切なり。此に於てか人事業務の平生尤も繁劇窮屈なる都人士は、其の休暇を要すると亦尤も切にして、而して都人士中の更に尤も繁

忙なるものに至ては其の之を要すると亦更に尤も切なり。故に見よ天保商人の店戸萬の富なきにあらず、弘化華族の家數十萬の財産なきにあらずと云へども、彼等は平生眠る如くに一生を送るが故に、亦更めて避暑などと云へる休暇を要するとなし、然れども今日の官員樣の如く其の公務の極めて激烈なる方々は先づ第一に休み玉はでは適はず、次に數多の文明商人、數多の文明事業家、數多の新聞記者、數多の學校教師生徒の如きは是非とも若干の休暇を爲さずんば決して命ちを持續くると能はず。而して其一年中の休暇を暑熱尤も激しき時に於てし、之を新鮮の氣を受くる尤も愉快なる時に於てし、名づけて避暑と云ふ。避暑や決して贅澤の遊びにあらず實に文明世界の一科業たる也、避暑の重んぜらるゝと彌よ重くして文明の進歩いよ〳〵迅速なるを得べし。今まや西洋人日本に來りて日本人は日曜日に安息するや否やと問ひ、彼等日本人が夙に之を休日として別に清潔するを見て頗る日本國の開化したるに驚ろけり。思ふに今後彼等をして再たび驚歎せしむるものは、彼の避暑安息の更に廣く行はるゝの時に在るべし。

然りと云へども、避暑の目的は只だ暑を避くるにあらず、實に暑を避くるの時に於て大いに新氣を吸收し、清く平生の俗塵を脱して奇麗に命ちを洗濯するに在り、若し只だ暑氣を脱せんとせば夏は官員を北海道に移して事務を執らしむべし人數の徒消すると必らずや少なからん、學校生徒は木曾の山林中にても假寓して教育を受くべし勉學の時代に於て二ケ月餘を空過するは絶大の損ならん、然るに西洋文明國の尤も利巧なるものすら尚ほ如此くせず、斷然數十日の日子を休了して決して惜しむとなく、啻に惜しまざるのみならず、衛生上、教育上、事業上、避暑の必らずや無からざる可らざるを主張し、例へば北海道の如き地方に住居するものと云へども尚ほ暑からざるに避暑すべしと云ふに至るを見れば、避暑の目的は決して只だ避暑するにあらざるを知るべし。避暑は只だ暑を避くるにあらず、實に暑を避くるの時に於て大いに心靈を清くするにあり、故に避暑の效益の莫大なるとを證するは、亦只だ暑を避くる效益の大なるを證するに止らず、即はち心靈を清化する效益の實に莫大なるとを證する也。吾人都門に在りて夙朝夜晩常に冷風を迎へ、月を望み、鳥に聞き、虫に感ず、然れども未だ嘗て一日田舍新鮮の地に遊びて爽快を感ずるの切なるに及ばざる也。人は地を變へずんば思ひを轉ずる

三

能はず、新らしき風景に接せずんば新思想を生かす能はず、特に自然の尤も自然なる所ろに會せずんば本性の自然發現するヿ能はざる也、於此乎吾人が山林田舍に入りて淸風新流に絶快を感ずるの理を悟るヿ極めて明白なり。

都門一新

都門は猶ほ大いなる池の如し、數多の水流此に入り來るなり。然れども此より出で去るもの、甚はだ少なくして、新來の新流尙ほ大抵は古化し去るが故に、池水漸やくに沈滯し、漸やくにして腐敗す、而して池中の魚鼈皆な之に醉ふ也。

吾人各國の主府盛都を歷觀するに、府都は是れ其國に於て尤も腐敗したる古沼池なるが如し、誰れかパリの都を見て佛國皆如此しと云ふ、誰れかロンドン府を見て英國皆な如此しと云ふ、誰れかワシントンの市を見て合衆國皆な如此しと云ふ、此等の中央都市は實に全國の腐敗を集めたるもの也、然れども全國中決して如此く腐敗したる處ろあらざるべし、都門の士は華衣美食して日に日に奢り樂しみ、紺絃醉歌の聲四方に絶ゆるヿなけん、然れども全國中決して如此く放蕩なる處ろあらざるべし、故に各國の主府を見て只だ其不德なるに驚愕するものは未だ可ならず、主府の不德なるは天下万世必らずや然り、只だ能く此の不德なるを明察して更らに此の不德を鮮化するの淸風新流何處より來るやを考ふべし。吾人屢ば西洋各國の基督敎會に不潔甚はだ多きヿを聞く、而して吾人は實に其の此れあらんヿを信ずるもの也、然りと云へども此の不潔なる各敎會中に一種の新鮮なる靈氣あり、十よく百を動かして常に之をして善德なる事業に活動せしむるを見れば、基督敎會に注目するの社會學者は其の外觀の外に別に一大考案する所ろなかる可らず、吾人が各國の主府盛都に注目するヿ實に亦た如此し。請ふ人自から顧みよ、汝ぢが一年は猿猴にして、一年は天使なるにあらずや、左らば汝等が結構する所ろの國家にして何んぞ全美無惡たるを得ん、ソクラットは聖人にして惡相あり、文明國は善德至大にして惡業の亦極大なるもの也、左れば主府盛都が一國中に於ける尤も腐敗したるの象を現ずるは固より常に然るべきヿ也、吾人は只だ之ヿ共に德善の其傍に横はり存せんヿを希ねがひ、都門に寄來る淸風新流の果して如何なるやに注目す。

而して其の淸風新流の尤も有力なるものは、文學上に於て發す、大學門より現はる、田舍間の人物中より來る、蓋し文學は人心を溶化する最大の魔力あるもの也、其の美なるものに

至れば今日活版に上りて明日四方に流布し、乍ちにして滿天下の人心を一調子にす、又大學は人智の尤も高く人德の尤も淸きものを出すべき聖所也、其卒業生にして若し正常なる卒業生にてあらば、彼等は今日學窓を出でゝ明日國家の氣運を一轉化するを得べし、又た田舍間の人物は人の尤も有力卓拔なるもの也、古來都門に於て英雄豪傑を出したることなし。楠公は山より現はれ、ワシントンは村より起り、今の内閣諸伯は武骨なる薩摩長州より出で來れり。之を以て文學の花新たに咲き、大學の門新たに開き、田舍人物新たに出でゝ、常に四方に向ふ、喩へば雲雨の山より起りて沛然として東西南北を潤ほすが如し、而して此等の三要素も地方よりして現はれ來るときは、其の都門に淸來し、新入し、彼の濁々たる腐敗士人を鮮化するや實に爽快なるものあり。

請ふ見よ、歐米各國に於ける最とも著名なる大學は田舍間に存するにあらずや、而して學者は或は之に立籠り、或は山林に靜居す、斯て其の文學の氣常に新鮮なり、人物は四方の山間野間より現われ、必らずしも市都に於て五斗米に腰を折らず、或は山を倒し野を高めて自由に偉大の事業を爲す、彼等は侵さるゝとなく、汚がさるゝとなく、妨げらるゝとなく、卑しめらるゝとなくして活潑々に運動せり、故に其氣常に新鮮勇快なり、而して此等の氣斷えず都門に吹入る、俗吏の頭も之が爲めに冷やされ、商人の心之が爲めに洗われ、政閣の雲之が爲に拂われ、都人士の好尚之が爲に改革せらる。

嗚呼日本の京市よ、汝ぢ少しく其の口より吐出し來れ、大學は須らく北海道もしくは木村の山中に入るべし、文學者は北海濱高く景象偏烈なる處ろに退ぞくべし、新聞紙は賄賂の襲ひ來らざる所ろに立つべし、子弟は官海に泳がんとを願はず自由に地方に於て雄飛すべし、如此にして若し常に淸風新流の寄せ來るあらば、百の後藤伯大聲疾呼して都人士の爲めに痛歎すと云へども、吾人亦た枕を高うして安眠するを得べし。

抑そも吾人は三日の間に於て少しく新空氣を呼吸したり、全市百萬の蒼生は何の日にか雲霓を望むとを得べき、切に地方分權、地方青年會、地方私立學校の勢力增大せんとを祈る。

社友月の舍怒、此頃暫らく山林に隱居し、「熱々冷々」と云ふ物語十篇を草し來、編者之を一讀するに中々に面白き處あり、故に次號より漸次掲載することゝ致せり。

論説

○靈界の危急存亡

星野光多述

私の演題は殊に形躰上を離れまして靈界の危急存亡と云ふ題を掲げました、茲に就て其順序を追て暫時お話したい考へで皆様の御了解に便利ならん爲め大凡ろ此演説中七つの要點を此に掲げて置きます則は

靈界の危急存亡
一 人心の頽廢
二 罪惡の權力
三 善惡二力の戰爭
四 人心の危急存亡
五 救援の必要
六 援軍の要性
七 全勝利

古代に在りまして夫のバビロン、ニネベ抔申します所は昔し最も繁榮でありました、都の遺跡を弔ひます所の旅人の僅に其處に往つて見ます時はたゞ雜草は生ひ茂り或は石瓦の如き物は此處此處に散在して居りまして更に懷舊の念を惹起すべき者もありませんけれども若し少く眼の開いて居る者の昔し繁榮でありし所の此の城跡を觀ました時は其種々の碎けたる或は切れ切れに爲て居る聊かの物に就て觀ても此處は昔し如何に繁榮でありしかを略ぼ知ることが出來ます、其れ故に近來考古學を致します學者達は最早地面の上には更に跡形もない樣な所に於て土中より堀り出されたる僅かの石や瓦欠けに據つて推想して此處は昔し繁榮したる都の遺跡であると云ふことを略ぼ推察するに至りました。

借て今私が諸君と與に相携へて觀廻はす所の城跡は彼の羅馬の都や或は「バビロン」「ニネベ」抔云ふ都でない此に昔し繁榮なりし一の都が御座います其都では昔し神と人とが住みました眞とに貴ひ都で御座いましたけれども惜ひ哉今日此處を旅ひする人は其荊棘茫々と生ひ茂り或は石瓦の欠け抔があり又狐、狸は其中に住ひ或は毒蛇、猛獸の如き者が其荒れ果てたる廢に臥れ居る情態でありますから誰れあつて此處を昔し實に立派なる都、繁榮せる處でありしと云ふことを想ひ出す者もなく又誰れしもこゝに來りて懷舊の涙を垂るゝ者もないけれども今日聊か見識の有る人目の利きて居る者であつて一度び其處を通れば何となく其身に寒さを感じ何となく懷舊の念を催ふすことで御座います其都は何處かならば即ち人の心で御座います。

私が今諸君と與に弔ふたる此舊都趾即ち今日の人心は果して昔の如く立派なるものなるか決して然うでなく實に零落衰頽を極めて居まして其は宮殿は頽れ其居根は腐れ瓦は地に落ち雨は漏り其庭園の貴ひ草木は枯れ果てゝ多くの雜草が茫々と生ひ茂りたる眞とに憐れ敢果なき情態でありますなれども若し此に人あつて其荒れ果てたる中を分け入て彼處等此處等に在る所の石、瓦抔に未だ存して居る太古の文字抔を研究したならば之れは昔しの都王者の宮殿でありしと云ふことを知ることが出來ます此王城即ち昔しの人心の都を視たならば實に美麗なりしものならんに今斯くも荒開廢荒れ果てたる情態ではありますが又こまかに此都跡を調べ見れば奥ゆかしき處が存して居ります喩へば身は盗賊で人を殺すとも何んとも思はざる所の者で在ても若し幼き子供が今己れの目の前に於て水の中に入らんとする時は走て之を惹き止むることが御座ります又己れ盗人であつても今實に貧賤なる者を見れば人の金を奪つたものであつても之に施しまするとがあります斯く匹夫惡人にして尚も善德を知らざる者と雖も尚ほ其心の底に聊か奥床敷所の形跡を觀ることが出來ます今日の人心とは實に憐れ敢果なき情態であつて彼の「バビロン」の城跡抔に較ふれば轉に優て懷舊の涙を絞ることでありますけれども多くの旅人は此古き城跡を探ぬる時に此美麗なりし人心の懷舊の念を起して涙を流す者の至て微々たることは眞とに歎息の至りで御座います然るに今日聊か殘れる所の美麗なる人心即ち王都の石や瓦の欠け抔に據て能く調べ看れば昔し此都に於て神と人とが住居を爲して居りし時は實に美麗なるものであつて燦爛たる紫雲たなびき樂園には實に清潔なる水が流れて居り又親愛喜樂の美德の花は開て居り信義公道の麗しき果實は結んで居り其情態は實に熙々として樂んで居りました然るに今日に於ては其宮殿は勿論奥庭に至るまで眞に憐れ敢果なき情態に陷て其美麗なる花は散つて仕舞ひ其味よき果實は結ばざるのみならず其木は枯れ果てゝ多くの雜草が茫々として生ひ茂て居り又其宮殿に於ても居根は頽れ柱は折れ地板は破れて遂に狐狸の住ふ處と成り果てゝ居ります之れ即ち人心の實に憐れむべきもので御座います然るに今日一般の人の心の奥底を探ねて視れば何うかして此零落れたる有樣を脱れて更に美麗なる昔しの姿に歸らんとするの願ひが御座います喩へば此に若し貴族なり或は華族に列つて居りし者が一朝にして彼の賤しき車挽きと爲つた時は主人は勿論其妻子に至るまで實に憐れなる者であつて常に以前の家柄に回復し樣と心懸くるもので御座いませう之が若しも以前に欲を擅ひて居りし者であつたなれば左程でもありますまいが元とが元でありますから其限りなき哀みは實に憫むべきもので御座いますかく今零落を極めたる人の心も古よりかく零落しかく穢れたるものでなく反て昔しは實に美德を備へて居つたものである其れ故に人心の常に深く願ふ所のものは何卒して昔しの立派なる都に復したいと云ふにあります今日本にしても朝鮮にしても各國の古い歴史を探ねて見れば昔の人の心は眞とに正しき者で

Digitized by Google
Original from COLUMBIA UNIVERSITY

あつたとが分りますす彼の「アダム」「イブ」の時代は實に神と人と與に往來し神と與に交つたもので御座います然るに遂に今日の如く斯くも墮落の有樣に陷て居る人心は何卒して古き美麗なる都に復らんとするもので御座います。

次に今日の人心は斯くの如く荒れ果て斯くの如く衰頽せる其上に罪惡なる一種の亂賊が此の城跡に力を擅に致して來りました實に此の城跡には雜草が靑々として生ひ茂りたる計りでなく宮殿の壁が破れて居る計りでなく恐るべき亂賊が住み嫉ふべき狐狸の住居する樣に爲りました斯の如く人の心の亂れると與に其心の中に入り來る所の惡魔が非常なる勢力を得るものでござりますさて人には皆腦髓がありますが此腦髓なるものは只今述へました人心と云ふ古都に取ては尤も大切なる所の朝廷でありますす今此腦髓なる朝廷に出化する所の百官有司とも云ふべき者を見給へ其百官有司は悉く虛僞であるか將た架空であるか其腦髓に日中起る所の事物想像及び夜中眠れて夢みる所の事は總て架空に屬するものと云はねばならぬ然かして又此胸と云ふものも均しく王城の宮内であつて此奧ゆかしき宮中に住む後宮妻妾の間に行はるゝ所の道德は果して正義公道であるか將た相互の怨みと嫉みを以て爭て怒りと惡みとを以て溢るゝ所のものなるか嘗て支那の朝廷に於て宦官の勢力を得たる當時は其朝廷の奧庭は實に汚れたる嫌ふべき情態であつたとは歷史上明に現て居りますさて此心と云ふ宮内の有樣は今如何で御座いませうか果して悉皆清潔のみに滿ちたるものなるか但しは己れ己れの情慾私欲を逞し得んとして疾惡妬忌の念は始終其間に動いては居らぬか備に五官のことに及んで見れば其目と云ふものは始終嫌ふべき事嫉むべき事惡むべき事を見張ては居らざるか又此手足は如何なる働きを爲し居るか始終罪惡の器械と爲て働いて居りはせぬか今斯く考へ看れば此腦髓より手足に至るまで人身には總て罪惡が充滿して居りますので強暴や罪惡は遂に此王城の頽敗中に王と爲つたので御座います其雄威と支配は人の全心全躰に及びたる次第にて誠に悲むべき有樣でありますするが併し此荒れたる朝廷の中にも聊か忠實なる正義派又は勤王黨と云ふべきもの無きにあらず其勤王黨や正義派と名くる所のものは是即ち良心である是非の心でありまして此者が心の中に充滿して居る惡魔に向て正當なる反對を試むるものでありまして頻りに骨折りて彼の罪惡に勝たんとするけれども惜ひ哉衆寡敵せずして如何とも出來ぬ有樣で御座います斯く人々の心は常に罪惡充滿して居るもの又惡魔の巢窟と云ふも決して過言でないと思ひます。

偖此罪惡に支配せらるゝ所の人心にも只今述べました通り其中にも正義派勤王黨と云ふものが聊か御座います然るに若し此勤王黨が悉く撲滅したならば此人心は忽ち惡魔の天下と爲るものであるが此勤王黨が聊か殘つて居りまだ全滅せざる中は聊か戰爭無き能はず即ち二つの力の戰爭が起ります此戰爭とは何かならば我々には常に善惡此二つの力あるを覺へますので若し私が一の惡しき事を爲さんとする時は一方の善なる者が之を引き止めます又善を爲さんとする時も一方の惡の力が之を牽き止めるもので此善惡の力が二つながら常に心中に於て戰ひをして居ります詰らぬ話しでは御座いますが或る若ひたる一人の職人が他人から僅か計りの煙草を貰て其煙草を吸て仕舞つた跡に金が殘て居りました其處で其職人は煙草を吳れた人に其金を返しに往きました所が其人が驚いて云ふに若し金が見當たならば自分の懷ろにしたらば良からうに何故替れに返しに來たかと訊ねました然るに其職人の言ふに此金を見出したる時より私の胸の中に二人の人が居て議論を始めました其一人の云ふには之れは天の賜物であるから之を以て一二日の仕事を休むが宜いと申しました然うすると又一人が云ふには實に身に適はない金は取らぬが宜い彼の人が吳れたものは只煙草である金は謨て與へたるものであれば若しも之を取る時は盜人と同じである之を知らずして與へたるものなれば先方へ返へすが當然であると答へました斯の如く私の胸の中には二人の議論が始まりまして寐ても眠られず難しき論が御座いましたから如何にも心苦しくて困る故御返し申しますと云て持て來たと云ふ事が御座います誰れにしても常に其人の心の中には此善惡二力の戰爭があるものゝで或は君に不忠親に不孝朋友に不信義をしたならば其胸中には正義派が起て之を責めて居りますので我胸中には常に戰爭の絶へ間なきものなるが我歷史を繙て彼の南北兩朝の時を見たならば如何で御座います尊氏は遂に昇ば天下を奪ひ取りましたけれ共尙ほ勤王の族が御座いまして即ち南朝では菊池氏京都近くにあつては楠氏新田氏或は護良親王抔此人々が居つた時は未だ全くは尊氏の天下ではありませんなれども悲哉護良親王は幽殺せられ菊池氏新田氏は滅び其南朝第一の忠臣たる楠氏は湊川に戰死して南朝の燈火は段々と消へ消へるに從て遂に天下は尊氏の支配する所となりました人心も亦斯の如きものであると思ひます少壯にして世の中に出でたる頃は隨分其良心が働きて居るものであるが成長するに從て其良心は段々と消へて殆と其跡を殘さずして遂に消へて仕舞うものでありますす彼の「パウロ」が申しましたには「我が願ふ所の善は之を行はず却て願はざる惡は之を行へり」又東洋の天地に其人ありと聞へた孔夫子の言に「義を見て移り不善を恥て改むると能はざるは之れ我が憂ひなり」眞さに其通りでありまして我々人心善しきを見て移るとも出來す不善を恥て改むるとの出來ぬは實にお互の病ひで御座います然らば人心の善惡此二力は常に我々胸中に於て火花を散らして戰て居るもので御座いませんか。

一歩進んで考んに此二力の戰爭の軍配は今何れに傾きて居るか南朝か將た北朝か恰も之れ南朝が段々と衰へる如く楠氏の滅ぶる如く人心に於ても亦正義派は段々と衰へるものである人の幼きより中年又大人と爲るゝ從て其良心も段々と衰ふるものである斯くの如にして罪惡の力は愈々益々人心に勢力を得て然して恐れむへ

き良心は石牢に閉じ込められ終に亡ぼされて仕舞ひます若し能く我々の心中を考へ看れは我々の心の中には種々の惡魔が充ち滿ちて然うして良心を壓し倒さんさします又た世の中には種々の惡しき我を罪に導く者があつて内外より寇が現れ起て我が心中に暴戻を逞ふし之が爲めに我が善正の力は日々に消ね果てゝ實に哀れ放果なき情態に陥て居ります此時こそは喩へは忠臣義士が亂賊の爲めに取り圍まれ勢つきて將に戰死せんさする塲合でありまして此良心の正義派の爲には實に之れ危急存亡の秋で御座います彼の加藤清正が朝鮮の蔚山に於て敵の爲めに圍まれて其圍みは愈々益々嚴重で若し我軍之を救ふとの或は五日或は十日も遲かりしならば清正は勿論多くの兵卒に至るまで悉く城中の露と消たで御座いませう之と同く今我々の正義派即ち良心も我心中に在りても亦斯の如き情態を爲して居ります故に若し今日の儘に打棄て置けば此正義派は戰死して仕舞ひ如何なる不義を爲し人情を破るとを爲すも毫も顧みさる實に淺間敷情態に陥るさ思ひます人心危く道心微なりさ云ふは實に今日の有様であります今我寐床に於て胸に手を置き靜に我心中の戰塲を見る時は彼の正義派即ち良心の力は今や滅亡に近寄て居ります故に若し此時を此儘に打棄て置かば此良心は哀れにも彼の罪惡の爲めに全く亡滅せしめらるゝ所さ爲るもので御座いますなれども幸にして清正が蔚山に圍れて居る時に我援軍を得て然うして九死の中に一生を得大敵を追ひ拂つたるのみならず實に我日本國の武勇を海外にまで振ふとが出來ましたが又近くは西南の戰爭に賊將の西郷は一度叫ぶ時は鹿島を手に入れ二度叫ぶ時は九州を掌握する所の勢を以て熊本城を圍みました然かして熊本城は賊軍の爲めに圍まれ谷將軍は虎の如き兵卒をもつて居たれども如何せん衆寡敵せず粮食全くつき果てたれば若し此儘にして捨て置く時は數日を出でずして熊本城は落ち多くの兵士は悉く戰死し賊軍は忽ち九州を押領しそれより中國に押し寄せ來り終には天下の一大事とも爲る塲合でありました故に關東にて油斷せず多くの軍勢を集めて九州に發向せしめ漸くにして熊本城を救ひ出したのであります。

今此危急存亡の塲合に當ては第一に要すへきものは援軍である若し此援兵のない時は如何に勇猛なる加藤にても蔚山に打死をします斯の如く人心も今日の如き危急なる塲合に當て援軍を出さぬ時は人心の正義派は必ず打死をしなければならない故に彼の熊本城が賊軍の爲めに嚴重に圍まれて今や實に危急なる塲合に當て官軍方にては東京より數多の援軍を出して賊軍を其後ろより攻め又城兵は賊軍の後に官軍の旗を見て大に勇み戰ひ賊軍は已れの後ろに官軍の援軍あるを見て大に辟易し官軍は之に乘して内外共撃して其嚴重なる圍みを解きしのみならず賊軍を田原坂に撃破り城山にみなごろしにし忽ちにして九州は再び官軍の有さ爲て賊軍は滅亡し日本國中天下太平と爲りました始め熊本城は賊の爲めに嚴重なる圍みを受けて居りまして實に危き塲合でありましたけれども幸にして關東より援軍を出した爲めに城を全ふし身を全ふすることゝなッた次第にて人心も亦斯の如く今日人心の正義派さも云ふへき良心は彼の賊軍即ち罪惡の爲めに實に嚴重なる圍みを受けて居りますから若し之に援兵を與へぬ時は其正義派は悉く戰死しなければならぬ此實に微力の良心は今大敵たる罪惡に向て只已れの力のみを以て打勝つとが出來ますか只自からの力に據て此大敵たる罪惡を悉く退けんとするも如何に勇將猛卒なるも斯の如く賊軍の爲めに圍まれて居るならは到底打勝つとは出來ない故に之を切り拔けんとすれば是非とも援軍がなければならない其援軍は如何なるものかならば即ち道德と宗教である然るに道德であつても此宗教なるものを假らさる道德に於ては人心に幾許の益を與ふるとは出來ませぬ之れは歴史を見ても能く分るとである彼の宗教を假らさるの道德は何れ丈け社會を改良するとが出來ましたか即ち此宗教さ云ふものでなければ斯くも大敵の罪惡の爲めに圍まれたる良心に危急存亡の情態に陥りたる善正の心を救ひ出すとは出來ない故に宗教さ云ふ一の援軍が實に必要なるとは又明白なるとであると思ひます。

而かしながら鰯の頭も信心からさ云ふ道理を以て此危急の塲合に人心を救ふ事は今日の世の中にある總ての宗教中何れにても宜ひかならば實に然らざるものであります其れ故に其援兵の性質を研究せねばならぬ彼の熊本城の圍まれたる時にても如何に關東より多くの援軍を出しても其援軍にして若しも悉く藁人形であつたならば賊は嗚呼愍むべし東京より藁人形の援兵が來たさ云て賊軍は決して恐るゝものでない彼の水鳥の音に驚く平家の軍勢か秋の風に散る木の葉武者であつては兎ても其圍みを撃破るとは出來ない何うしても猛虎の如き援兵でなければ決して役には立たぬ其れ故に宗教も其如く只宗教だからと云ても彼の佛や神の偶像を拜する宗教でも宜ひさ云ふ譯にはまいらず是にては兎ても人心を救ひ出すとは出來ませぬ彼の人の手にて細工したる木像や鍛冶師の槌にて造りた金佛の如きものでは此實に危急存亡の城に陷て居る人心を救出すと出來ますまい果して斯の如き石や木或は金物を以て造つたるもので此危き人心を救ひ出すとが出來ますか上州に松林山さ云ふ山が御座います此山からは年々澤山のはりこの赤達摩が出ます其達摩は一抱へもある大きな物で且目がございません此達摩は蚕の神さか云て其近在の百姓が之を買て内に持ち歸ります然うして之に目を入れないは譯のあるとで百姓は其達摩に願て云ふに松林山の達摩様よ今年の蚕をあてさせて下さらはあなたの目を入れて上けます若し蚕が惡かつたならばお氣の毒ながらあなたの目は入れて上げることができませぬさ申し之をたなの上にかざつて置きます斯の如き援兵で果して人心を救ふとが出來ますか斯の如き人形斯の如き貼子が能く人心を危急存亡の中より救出すことが出來ますか又た同じ上州で或處を旅ひをしましたさき

Digitized by Google
Original from
COLUMBIA UNIVERSITY

に同行者の云ふには此邊は名けて裸天神と云ふ奇妙な處で御座います此地の人の申すに此處には天神の祠が在て以前は寂しき處で夜など其處を通ると其祠から追剝が出て然うして旅人を全裸にして仕舞うから其れで之を裸天神と申しますと話しました全躰神は皆眞なるもので罪惡を追ひ退くべきものであるに其社内から追はぎが出ると云ふ樣にては其神の力や其宗教の力にては兎ても人心と云ふ不思儀なる者を罪惡の中より罪惡の階下より救ひ出す事は兎ても望のなき話でござります然らば如何なるものが此危き人心を救ひ出すの力を持て居りませうか彼の佛教なるものが果して之を救ひ得べきものか決して然うでない地より出るものは地に歸し人より出るものは人間を救ふべき力はない即ち世に多くの神と唱へ佛と唱ふるものこれら樣々の偶像教にして此大敵なる罪惡を悉く擊破り以て正義派即ち眞心を救ひ出すとは決して爲し得べからざるものである故に此時夫の天より援兵の出ることが必要である即ち人の心は元と天より出てゝ居る故に此危き人心を救ふ爲めの援兵も天より來なければならぬ其ものは何にかならば即ち基督教である基督教は天教と名けて居る基督教の行れて居る社會を見よ其人心を見よ基督教の社會に於ては夫の眞心の正義派が腐敗に圍んで居る大敵たる罪惡を擊破る所の力があります實際基督教の行れて居る其土地其部分の人民に於ては人々の免れざる所の罪惡を段々と打去て遂に眞心が人心に充滿する情態を現はす譯で御座います而かして、神の子の現はるゝは多くの惡魔を滅さんが爲め惡魔の力を絕たん爲めである基督の此世界に現はれたるは即ち此世界の惡魔を退けて人心を再び幸ひなる神の都と爲さんが爲め人心にある多くの罪惡を追出して眞と美麗なる神の都とならしめんが爲めである今目を上げて天より來る援兵を見よ其戰く所の兜は救ひの兜である其胸當肚卷は愛を以て義を以てし其劍は眞理の劍其持つ所の楯は信仰の楯其旗は十字架の旗を押し立てゝ然うして此眞と共に懸れ放果なき社會に來るので此援兵の向ふ所は人心に充滿せる最も惡むべき罪惡を退くることが出來社會に充滿して居る多くの奸惡を追ひ拂ふことが出來ます然うして以て斯くも荒れ果て、狐狸の巢窟と爲て居る處も再び變じて昔の王城と爲し此腐敗したる人心も再び變じて舊の眞心に歸ることが出來此荒れ果てたる庭園の雜草も變じて眞木と爲り眞と美麗なる花を開き誠に甘味なる果實を結ぶ昔の庭園と爲て信義公道實に幸なる社會の狀態を現はすことが出來ます然に世の此援兵を求めず此援兵を敢て顧みぬ人々は果して罪惡に全く打勝ち得るの人々なるか果して皆眞方正なる人々となり得るか此頹廢したる人心此危急存亡の域に陷て居る人心を救ひ出さんとすれば天下耶蘇基督教を除くの外他に一もこれ有ることなしもし此宗教にして一たび人心の中に入らんか人心是より一新し忽ち舊の美麗なる王都に復して以て神と人と和らぎ神と人と交り樂むの古への神の都となりぬべしあな樂しからずや。

批評

○南翠外史の「唐松操」（其二）　雨仙子

何が故に外史の作を馬琴或はデュマのローマンチックなりと云ふや。「唐松操」に於て是を證せば、

第一。妖怪山の趣向即ち蠻人鬼裝をなし勇士を誘ふの趣向は水滸より脫胎して馬琴の慣用せしものなり。

第二。少年の後來を勇士に托するも同案。

第三。兩將軍伊富伯爵を刺んとす、是れデュマが常に得意とする處の立案なり。

第四。唐松操表に同意して暗に伊富を救ふ、是れ支那小說に往々見ゆる趣向にして馬琴も珍重せしものなり。

第五。ファンシーボールの段或は鴻門の會より脫化せしならんか、然らば愈々馬琴を離れざるなり。

是等の數點を以て見るも馬琴或はデュマある事は知らる。蓋し馬琴の作は馬琴時代にあつて珍重せられたれど今日に於て見れば頗る笑ふべきもの多し。ローマンスは元よりノーベルの幼なるものなれば今のリアリズムの主義より見れば趣向の荒唐なる頗る呆然たる處あり。試に兒童の遊戲を見よ、紙冑を被り木劍を振廻し竹馬に乘り木に登り丘に駈り身ら英雄に

擬して傲然たり、然れども其漸く長ずるに及んで又昔日の紙冑木劍を顧みず丘陵竹木は其自然を樂しむのみ。余自身の經歷を考ふるも余が初めて小説に接せしは八犬傳にして當時余は此書を頗る愛讀して童友打寄て戯るゝ時は自ら親兵衛の魁力智辨に擬して大に愉快なりと考へたりき。今に於て思へば唯默笑するのみなれども其當時には富山に老君を助くるの勇館山に梟雄を挫ぐの辨共に余が狂喜して止まざる處なりし。是等は凡て馬琴が趣向のローマンチックに走りて終に人間以上の人間を寫せし缺點なれども思想の幼なる人より見れば如何に氣味よき事なるらん。今の小説時代は漸く其幼時を脱しセンチメンタル次第に行なはれんとするは文學の爲め喜ぶべき事にして例へばツルゲーチフ風の趣向芽出さんとする勢見ゆるゝ余の大いに喜ぶ處なるに南翠氏の才筆を以てローマンチック而も馬琴風の最も幼なきローマンチックを得意とせらるゝはそも何故ぞ。是も今日ロンマンス作者に乏しければ氏の作は稱揚せらるゝあれど仝じくは一歩を進められたし。馬琴時代は過去りたり、今更に妖怪山の趣向も古たるにあらずや。然るに民友社の高橋五郎氏は此趣向を新奇と考へられたるが如し、博識の聞へある人猶ほ馬琴の雜著を讀まざるか。

され云へ南翠氏の筆及立案とも兎にかく今日にて一派をなせば「唐松操」に於て大瑕瑾を見出すを得ざれど少しく疑ふ處を擧げん。

「唐松操」は全篇の趣向二途に分れて貫徹せず。小説に尊ぶ處は全篇の趣向の一徹にありてもし一徹せざれば大に興味を損す。馬琴は大編を作るに妙を得、八犬傳の如き百六卷の多きに到りしは我國無比と云ふべし。然れども大編を作りしが爲め往々無用の人物無用の趣向を描出して全篇より曰へば何の効も何の妙もなし、唯紙丁の增加して幕數と役者の殖へるのみ。夫すら百餘卷の八犬傳も各樣各趣の脚色より成れるにあらざれば讀了て毫も滅裂の感なし。犬士の離合聚散常なしと雖ども犬士の冒險經歷は時に無用に似たる幕或は役者を出せし事もあれど金碗伏姫の因緣は常に離〳〵れにあらんとする趣向を巧みに繫ぎ止むるは流石に馬琴の大手筆と云ふべし。今「唐松操」を見に發端即ち愛宕に水府の浪士大洗五十麿が高木縁に面會して一子淸丸を托するなれば淸丸も隨分主要の地位を占て然るべきに後回に到れば有ても無くても濟むべき無用のものとなる。其他武平お米等いづれも中途に於て空しくなり更に十九回に於て新人物出づ是れ共に舊趣向悉とく變ぜ

り。もし大團圓より曰へば此編は唐松が信義に迫られて自殺する趣向なれどそは中頃より顯はれたる新事實にして申さば前半は無用に屬するが如し。小天狗三平が小松を攫ふも靜波靜之進がお千代を捨てたるも綠がお千代と夜の菊を見るも德三がお琴と揚原を去るも皆枝葉に走りたるものにて無用ならざるはなし。武平夫婦靜雲軒大洗五十麿三平お幹お鶴等前半に於て主要のものなりしに後半に到つては惣て無用となる。是等無用なる人物事實本篇の三分の二を占め、而して大關係ある伊富伯爵と唐松との間柄は冷々に敘し了り、如何にして兩將軍が伊富を刺んと志ざせしや、それ等は頗る曖昧に述べ去りしはそも本篇に取りて惜むべき事なり。而して作者は此片々になりたるを無理に繫ぎ合せんとて賣卜者靜雲軒を妖怪山の殘黨としお千代の實父とし右に左に關係を有せしめ終には其人をして假裝會用の服を調進せしめし如き巧に似て最も拙なる者。其他德三を武平の子とし大洗を法師とし强て妖怪山に照應せしめんが爲に大團圓に此老法師を出せしは皆破綻を補はんとして却て其痕あり〳〵と現はれて妙ならず。而も是等の事實は人情に遠くして京傳馬琴等の最短處たるドラマチックを脫せざるなり。

次に小瑕瑾ながら如何にローマンチックが趣意と云へ餘りに疑訝に堪へざるものあり。十六頁高木の詞に＝世を忍ぶ身が＝トあり、然るに此世を忍ぶ人が何故に愛宕の妖怪退治を思ひたちしや、また壯年なりしとは云へ高木ほどの沈重なる人が何の爲に莊屋を嚇して樂しむや、又如何に妖怪退治と云へまだ白羽の矢も立ぬに何の便利あつて岩見重太郎宮本無三四の故智を學びしや、又大洗は如何なる天眼通あつて此冒險者を高木なりと知りしや。第四回より第五回を見れば小松と綠の間は武平常に往來の使とあるに見も聞もせぬ三平が大事の使命を帶びて東京より來ると云ふも怪しきに綠は地方に赴任して呼迎へし妻に一言を殘さぬに小松は少しも怪しまず、疑はでも疑はるゝ證跡許多存する中に平氣になつておさん長屋に或はお鶴の座敷に日を送るはそも何故ぞ、是が怜悧にして氣骨ある西京婦人の本色か。綠即ち後の唐松及び小松は本篇の主人公なり又陪主人公たるものなれば是が性情を審らかにするは最も必要なるに此二人に於て既に性情の描寫を誤る事此の如し。余は殊更に他の無用に屬すべき小瑕瑾を擧ず、世間讀者容易に是を知ればなり。

Digitized by Google
Original from COLUMBIA UNIVERSITY

南翠氏の長は前既に說けり。今短を擧げば、

第一　文字深重なれども綿密を缺く。

第二　結構大なれどもローマンチックにして終にはドラマチックに陷る。

深重は猶ほ作るべし綿密は求めがたし。結構の大猶ほ作るべしドラマチックは終に脫するを得ず。難い哉。

第三十回及大團圓は超絕非凡の文字。唯此二回を以て文界の中に錚々たるべし。

正誤。前號本評の第一回に「溺世」なも南翠君の著の如くにせられしは南仙子の誤なり、左るを其儘に掲載したるは吾が大なる過ちにて時節柄恐ざる至りさ謹しみて正誤す、編者白

雜錄

〇國船

しのぶ

われ太たく薩摩琵琶を好む、其の凄れたる音破るゝ如く絕ゆる如くにして且つ鬱勃たる力あり、擊調急切にして雅味甚はだ高く沈痛にして頗ぶる慷慨の氣あり、三絃は固より言ふに足らず、箏は綿和にして優淫、甚はだ氣骨に乏し、尺八は漫漠幽靜なりと云へども吾が神を動かすに足らず、笛に至りては淸絕多く心を澄ますものありと云へども調狹まく小さくして偉大の感を起す能はず、但だ薩摩琵琶に至りては極めて壯雄高雅なり、頗ぶる吾人が鬱憂沈隱の質に適す。而して近頃ろ西幸吉氏の撫奏せらるゝを聞き、特に其の「國船」と題したる新曲の節を味わひて非常に激歎したり、實に日本國は海中の大船にさも似たり、吾等同胞安んぞ相愛して、互に結托し、各自其任する所ろに勉强して之を彼の岸に到達せしめざるを得べけん、米國の一詩人亦歌つて云く、

ヲー汝ち國の船、進航せよ　强く大なる共和國、進航せよ
人は總べて恐れと望を以て　汝ちが吉凶に息もせで打任す
船大工は誰れぞ水工は誰ぞ　帆を造り繩を造り綱造りし誰
金敷の音何如に槌の音何如　望の錨つくりてし鍛冶場の火
そも何如に熱つかりしぞや。
響きと打ちをおどろくまじ　其は波にして岩にはあらじ
其は羽ばたく白帆の聲なれ　風に裂かるゝ音にはあらじ
岩は高く暴風は荒るゝとも　濱邊の光り何如に迷わすとも
波に恐れで只だ唯進航せよ　吾等が心、望、みな汝ちにあり
吾等が心も、吾等が望みも　吾等が祈りも、吾等が涙も
吾等が信は吾等が恐れに勝　常に汝ちと共に與にぞあらん

鐵の淚は氷冷の落淚に愈さる。

○忠臣義士節婦孝子

むらさき

忠臣あり義士あり節婦あり孝子あり、社會は荒野に非ざるなり世は未だ澆季に至らず世人安んぜよ歴史は是等の人あるが爲めに錦繡を以て飾られたるの感ありと、然り俗眼を以て見れば或は然からん、犬よく其主を知る蓋し一片の肉あるが故なり、三顧の勞あるが故ゑに臥龍は草廬を捨たるに非ずや、多年の恩惠に身を養はれたるが爲めに四十七士は命を致したるに非ずや、優渥なる愛情を受たるが爲めにポルシャは炭を飲みたるに非ずや、雙親の慈愛厚きによりて王祥は身を氷中に置きしに非ずや。世人が忠臣義士節婦孝子と稱する者は受けたるものを返せしのみ己れを愛ずる者を愛するは何の益あらんやユダヤの税吏だによく恩を知れり犬亦たよく受けたるに答ふ何ぞ特に之れを尊び之れを敬するの理あらんや、然るに歴史家は特筆大書して之れを掲げ文學者は是の如き理想を造つて最極の者とし世人は舉て之れを賞す世上道德の程度刮目して見るべきなり、義人の爲めには死ぬるもの稀に仁者の爲めに死ぬるものもやあらん然れども何人かよく敵の爲めに命を捨つる者ぞ。古今の歴史を播て商賣的の忠臣義士を除き交易主義の節婦孝子を削ば歴史は果て錦繡たるを得べきか。

○仁者の葬、義人の死

みどり

仁者の爲めには命ちを棄つるものあらん、左れど義者の爲めにするもの至つて少なし、人は善を樂しむ中ちにも尙は多少の罪臭を存する也。われ紳商の葬むりに會するに華美の行列するを見る、固より厭ふ所ろなりき、左れど仁者の葬むりに來るもの幾千、義人の死に雨中數人棺を擔ふて行くを見る亦實に悲しきと也。むかし富めるものあり、紫を着、細き布を着けて日に日に奢り樂しみたり、門前に乞食ラザロ病みて伏す、犬來りて腫物を嘗むれども拂ひがたし、富めるもの死せしとき、花は山を爲し線香は雲の如く立引しとか、而してラザロは死して骸を野外に棄てられたり、左れど彼等が靈は死せし以后大ひなる苦樂の變化ありし。人世萬事空々、下天の賞罰賴むに足らず、われ若し大道の存する所ろを知らずんば、此の良心を何如にせん。

○文學者の英雄崇拜

輕快子

太閤樣を有難しと思へば桃山の全盛も驕奢にあらで其功蹟を考ふれば黃金を瓦としてもト恐れ崇とみ、東照公を有難しと思へば武士には恥かしき敗北をも理屈を附けて無暗に賛めそやす。是ぞ英雄崇拜とてカーライルが万斛の墨を費したるも

是に斈る。英雄崇拜は世界をしなべて其弊に陷り、上と下とは流俗に誤るゝ事少なき文學界にも及ぼしける。昔思へば明代の浮華に陷りたるも又此故のみ。今は雜駁の中にあれど彼は誰此は誰と各々尊奉する處ありて多少その爲に束縛せらるゝ氣味あり。元より先人は尊奉せらるゝほどなれば是に擬して其妙所を得るは大に喜ばしけれど、凡そ妙品は缺點に富むものなれば、强て其神を得んとして缺點までも擬するに到るは大に悲しむべし。昔し東山にて何菴とか申す茶の宗匠の席に節數七つある床板を好めり、何故にやと問ひけるに師の建てたる席の床板に節七つありしに擬するなりと答へたり(雲萍雜誌に見ゆ)。固陋の笑ふべき終には瑕疵までも師に倣ふに到る。名物逸品は極めて瑕疵多く、瑕疵多きも名物逸品にして許すべきに凡庸の者唯其瑕疵を學て喜ぶは愚も又甚し。聲色遣と云ものあり、役者の眞似をするものなるが役者の癖を取をもて主とする故に往々笑ふべく殆んど抱腹せんとする事あり。文學者が故人に摸倣するも是と全く若し其神髓を得て然る後に擬作せば能髣髴たるべしと雖も未だ充分に其奥を窺はずして徒らに表面上の摸倣を爲。さる故前の茶人と全じく骨折りて疵ある床板を索し、無時はわざ〳〵節を刻ませんとまで苦しみ、或は聲色遣の如く見苦しき癖を好んで眞似て獨り喜ぶは何たる愚かぞ。アジソン時代に文華煥發して其の美を顯はすと同時にミルトン、カウレイ等の詩に擬する多くなりしが是等文學者のみに許すべき缺點をも襲用して大に世の嗜好を亂したり。今の文學界には恐らく此弊あるまじ——又なからんを希望す。西鶴や馬琴や樂天やサカレーは大文學者に相違なけれど是と伴ふて大缺點もあり。擬せんとする者あらば其皮相に泥まず其神髓を悟れ。

〇子は奉ずる處なきや

傍に人あり問て曰く然らば子は奉ずる處なきや。余冷然として答ふ余の奉ずる處は信のみ、詩文信なくば悉く是れ浮華淫靡に陷る何ぞ尊むに足らん。苟くも信あらんには野人の作も又愛好すべし、何ぞ獨り所謂詩人或は文章家に於てのみ求めんや。我が愛するは徒然草靖節全集及スペクテートアの三篇なり、而して李靑蓮が飄逸杜少陵が高遠韓昌黎が雄健は常に欽仰して止まざる處なり。文章信あるをもて尊しとす、世の鏤細工流義に塗りちらしたるは俗臭頗る厭ふべし。

〇白居易は如何

更に問て曰く然らば白居易は如何。余答ふらく、白居易の文

元より嫌ふ處なり、然れども居易に於て是を許す。若し白居易の美麗なる文字に迷はされ其纎弱をひたすら眞似るものあらば輕俗更に厭ふべし。余は白居易よりも白居易の文を擬するものを嫌ふ。其人啞然たり、余大笑す。

○腮の女君に申上げます

腮の女君は女學雜誌第百七十一號の紙上雜錄欄内にて若殿原と題して我々青年を惡口されました。

弱氣たる猫撫聲、チヨロけたる下れる眉毛、臆病なる腰弱意氣地等は我々身に覺へがありませんから少しも痛痒を感じませんでしたが、時に大家に眞似ての製造議論は妾等決して聞たくも見たくもなしと仰せられたのは非常に痛く感じました。

我々は大家に眞似る積りではありませんが眞似たやうに見へる議論を致した事もあり、文章を作りし事もあり、併し我々は決して好んで之を致すのではありません、又淑女方に見せて歡心を買はんと求むるのではありません、誠に仕方なしに致すのです、腮の女君が此情實を察して下さらぬのは我々の怨む所です。

我々の本心は相應の實業を勉めて其餘暇に博く和漢洋の書籍を涉獵致し、有益なる新聞雜誌を五六種購讀致し、腮の女君の如き淑女と生涯を共にしたいのですが、不幸にして左樣旨く行きませんから、今日の如き淺墓な事を致して居るのです決して之を我々の眞面目と思つて下さるな。

腮の男　拜

腮の女君足下

○家族の幸福　しつの女

一筆しめし上まゐらせ候前々號の御社說眞正のホームには幸福を求むることを第一とせず道の爲に働らくことを目的とせよ左らば随がひて幸福あらんとの高說ありがたく承わり侍る、然し斯てはホームは下宿屋の如く恰かも造兵廠の工夫が二人合ひ宿する心地は致すまじきや若し只だ共に働らかんとの一事を專要と心掛んには何も特更夫婦と相成らずともの事と存じ候、むかしブロンテの小說に、ジエーンアイアは志想確固にして頗ぶる義に勇ましかりき女秀才なりしが、彼の印度の蠻地に傳道すと聞えたる高尚なるリバース君に向ひて只だ其の道に犠牲し身を獻げて善を爲すとの一事を以ては身を許しがたく、寧ろ前に罪惡あり後には目盲しひたる彼の弱點多き優けあるロチエスター君に心を寄せたるは、眞とに人の眞情を穿ち盡したる者と大ひに評判よろしく候、左候ときは高說の教ゆる

所ろは少さか人に冷理を示さるゝ譯にて有情の男女は中々に滿足しがたきことゝ存じ侍る、狹き心に惑ひまして解き出ん便りもなく拙き筆もてあら〳〵伺上候かしく。

御疑ひの事御尤もと存じ候得ども ジェーン、アイアが盲人に許したるときの決心にも幸福を求むるとの思は毫しもあらざりしならん、固よりホームの起る所ろ家族の理想とする所ろは第一善を爲さんとの心掛にあらでは適ひ申さじ左れど心合はず相愛せざる男女は如何にして相協力して道に働らき申すべきや大同團結も改進黨も共に國家を思ふの忠臣なれど其望む所ろ同じきとて黨を一つにする能はず況んや若し家を同うせば彼等斷えず果し合でも致し可申歟恐ろしきことに侍る、此を以てホームの目的は道にあり同行者の結び目は愛にあり而して其望みも結びも皆な犧牲獻身より生ずとの理を申したるにて候。

○小言の第一　　ゆかり老

ツンと澄し込で人が話し掛ても知らん顏聞えても聞えぬふり見て見ぬふり時々一寸と舌を出しオッーさげすむようなチャカスような笑ひ方をして今迄あたり前に口をきいて居たのが急に眞面目に應答をはじめイヤな當付を弁べて諷諫と心得傍の人と顏見合せてニヤ〳〵笑ひなどするは惡らしくも憐れに見え一番氣になるのは毎度申すようだが耳こすりこいつなか〳〵癪に障るやつでドゥカよして貰ひ度もの何もひがむと云ふ譯ではないが第一失禮な話しだもの、そうかと云てッペコペくだらぬ世辭を弁べ立てビタ〳〵おちぎも餘り感心せず一躰手前は色が黒いのと字の下手なのは自分でも愛想が盡るほどであるに某處へ行たら あなた眞事に御色白でいらつしやるよう御日にも御やけ遊ばさず御うらやむしう御座いますと云つたが何とも返事の仕様がなかつた。また或處へ行たら先達ては御手紙をありがたうございますあなたのような御手を持て御いでなさる方は廣い世界に(マサカ)少なふございますほんに御うらやましう御ざいますよ早速子供にならわせ様と存じて居ります所で(存じて居るから幸ひもし習せられた日には大へん)などゝ云れた時は顏から火が出た御世辭もなくては困ろうがこんな事はないようにしてもらいたいこれから私しは當時の女中衆の惡口を棚下しがして見たい時々惡まれに出ますが老人と思て許して下され。また此次に…………

Digitized by Google　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

○言葉に咲金の花

鵬といふ鳥摶て天をかけるときは、その翅九萬里ありとかや莊子が筆さきにしるしたれど、むかしからみたといふ者なければ云勝にありぬ、初めて江戸より上りたる墨髭のやつこ、御城内より出て兩替屋にゆき錢を買けるが、折ふし門を、鯛こち鱧などゝよびて、魚賣てとをりければ、何と亭主、こゝもとにてはいかほどなるを、大きな鯛とはいふぞとゝふ、されば大きい鯛と申は壹尺七八寸乃至三尺より、大きなるはござりませぬといふ、やつこ聞て、さても京はよろづものでとちいさい所じや、おてまへは江戸をみやつたか、いやまだみませぬ、それなら江戸のはなしをしてきかせべい、大きな鯛といふは、壹丈四五尺、ちいさいと云ても六七尺、いま賣て通つたやうな、二尺ばかりのは雜魚の中にあるといふ、亭主はらをかゝへ、さても珍しい鯛かな、お江戸は萬事大きなと申が一度は下りましたいといへば、やつこいよ〳〵つのりて天秤の上なる分銅を取てこれはこゝもとでいかほどにつかふぞとゝふ、それは二百匁分銅でござる、やつこ、手をうつてんとびやくらい、江戸の二分ゝ銅じやといふた。

○松はすねたる秀都

ある所に秀いちといふ座頭、日待のとぎにゆきけるが、とつとかる口ばなしにくたびれ、ちとねむたいといひければそばにおなごどもみて、そなたはつねに目をふさぎてゐたまへばねむたいとはあるまいがといひければ座頭きゝて、女房の身でもりて腹の大きなときは、食のくいたいことはあるまいかといひし、また此秀いちあるかたへゆきはなしけるが、もはや日もくれ道もとをしおいとま申ますといへば、ていしゆきいて、目の見えぬ身が日くれをいそぐはいかゞといへば、秀いち、いや日がくれますれば、目明がつきあたります。

兒藍

○わる較計（一）

先生は必ず來いと云われたから必ずあとから參りますと約束したその後教塲でいろ〳〵考た、惡らしひヰッ卜人をあなどる樣子も見る失敬な奴だ先生もひどひヰットのような者を可愛がつてモー決して行きますまい先生の家へ行てまたヰットに腹の立ような事をされるといけないから、しかし先生に約束をしてしまつたから行かずばなるまい遊に行た處でヰット

が居てはつまらぬァー／＼イヤダ／＼　私の心ではギットと云ふ名幾度呼だか分からない先生とギットはもう學校に居ない様子仕方がないからそろ／＼と出かけた學校より先生の家迄は四五町しかないが考へ込で居る故時間は二十分もかゝつたろうがまだ先生のうちへは一町ほどもある不愉快と云ふ感じが起たら子供心にもなか／＼とり去る事はむづかしひとり去る所か傍を見ると驚た不愉快の原因腹の立つ玉子なるギットが二人計りの子供仲間をつれて私しの方へ歩み寄て來るのだもの　私は逃て歸ろうとするのをギットは　ムーアさん御まちなさいと云ひながら飛で來て私の肩をつかまへた私はふりはなさうとするはづみに着物の釦がとれたその上に帽子も飛でしまつた、ムーアさん一寸と御まちなさい話し度事がある多分汝は意地の悪いトムを御承知でしよう此の語を半ば聞ば私は胸が割るほど迄に腹が立た　失敬な奴だ人の釦を取てその上帽子迄飛ばして一言のあやまりも云わずナンダ意地の悪いトムだあれは僕の最も愛する親友だゾヨセフ、ギットのような悪人ではないゾ馬鹿者メ　口を極めて罵たがギット

わたしのこゝろ　あとみ　かへつ

の顔色はすこしもかわらない私は馬たまし後も見ずに歸た

翌日トムに學校で遇たから昨日途でギットと喧嘩をしてとう／＼先生の家へ行かなかつた事とギットが意地の悪いトムと云た語をそのまゝトムに告げたするとトムは大層に怒て何かしかえしの種をと考　た私も今日迄くやしひと思て居るから一處になつていろ／＼相談をして一の計略を見付たそれは明日トムが運動場へ出た時に必らず上着を脱ぐに違ひないその時に上着を知れないようにかくして遣うまさかコートなしに教場へも出られまい」。翌日になると運動時間にギットは靜かに出て行た私とトムは知ん顔をしてソット跡を付て行くとギットは上着を脱でシャツ一枚やがてテニスグラウンドの方へ行て丸を一心になつて投て居たトムは私よりも二間ばかり後の方に居たが急に私の上級に居るマシウと云ふ子供に引ばられてテニスボールをしろとすゝめられたトムはいろ／＼と断た様子であつたが上級の生徒であり年も上で大きな強さうな人故トムも仕方がなく從た五六枚の着物が脱である所へ走り來りマシウもトムと着物を脱ぎ捨た私は此の時相談相手がなくなつて失望したが悪いたくみをまだ止める氣はない、私はギットの着物をそつと取て走り歸たが誰れも知らなかつ

たい きれ き ふ み き こ な あ み

た人の居ぬ所へ來て着物を見ると襟の裏に光る物がある見ると私しが昨日帽子へ付て居た叔母がクリスマスに呉た蝶々の

形をして居る金の留針と揃て着物を下に置くとコロ〳〵と轉り出した物がある見るとこれも私の襟に付て居た眞珠入の釦揃たサテハ・・・・キットが・・・・・・

史傳

○チャーレス、ヂッケンス傳（其一）　ふ、ち、

今は我國にてもＡＢＣを讀得る者――又讀得ざるも――少しく文學に目を注ぐ人は恐らくヂッケンスの名を知らざる者はなかるべし。スコット十八世紀の末に生れ十九世紀の初に盛んに著作して大に英國文學を發揮せしが是をして愈々光彩燦爛たらしめ終にビクトリヤ女皇時代をして文學史上に重きを有せしめしはヂッケンスならん。スコットは時代小説に長じシバルリーを以て好材料とし凡そローマンスの最も面白き原質は封建時代にありと明言せり、故に彼が好んで用ひしは攻伐を事とする勳爵士の義氣に對して是を奬勵する姫嬪の淑貞にてありき。ヂッケンスは是に反し陋巷の些事を取て巧みに材料を索出し人情の秘奥を穿つを以て趣意とせり、故に其傑作諸篇の如き悉く人間の肺腑に立入りたるは他の及ばざる處なり。スコットはアイデアル主義にして詩想に富めり、ヂッケンスはリアルを好んで眼前の景を巧みに描寫せり。共に其長ずる處を異にし各々特別の妙ありと雖も若し小説を最も狹量の意味より解釋すればヂッケンス或はスコットの上にあらん。彼が立案は元より社會の極賤にあればスコットの如く雄大ならずして人或は陋猥なりと罵るべけれど小説の主眼即ち人情の秘奥を穿つの巧妙に到つてはスコットも瞠若たるべし。試みにボズ氏雜篇(Sketches by Boz)を一讀せよ何等の結構もなけれど心の底の底、痒き所まで手の屆きたる或は風俗景情の極微を少しも手落なく寫したるは中々に他に見るべからず。初作に關はる短篇すら此の如きにまして傑作とも云ふべきピックウイック日記(Pickwick Papers)或はニコラス、ニックルビー(Nicholas Nickleby)の能く人をして笑はしめ若は泣かしむる不思議にもあらで是を英國文學に求むるに十九世紀のみならで古今の妙手とも云べし。余曾てグラスゴー大學の文學教授某氏の文學家年表を見に文學家を分つて三級となしヂッケンスを第二級に置けり。余は元より其編成者を難するほどの學識に乏しけれど竊に疑ふ氏は何故に第一級に置ざるか。スコットは空前絶後なれば元より第一級に置くも妨げなしと雖もヂッケンスは文學者として凡筆凡才なるや、リットン、

スモルレットと仝席のものなるや。よしスコットの作は雄大にしてヂッケンスの及ばざる處とする結構の大小に依りて上下の別をなすは最も偏頗なる批評法なり。ヂッケンスにウェーバリーなきも難ずべからず、スコットにピックウヰックなきと仝じければなり。彼れも空前絶後なれば是も空前絶後なり、彼が高妙なる詩想と是の極微なる描寫とは共に欽仰すべきものにして十九世紀の文學は此二人ありて以て燦爛たるべきなり。

今の世にありて春の屋氏はヂッケンスを好まるゝ爲にや氏の筆は大にヂッケンスに似たり。書生氣質及妹と脊鏡は多少異なりたる處あれど「こゝやかしこ」其他の雜篇の如きは恰もヂッケンスを譯せしにあらざるかと思はるゝ處あり。前代にては京傳(しやれ本に限る)及三馬の筆頗る似たる邊あり。是等いづれも其目的を仝じくしたれば其文の類するも怪しむに足らねどヂッケンスを知らんには此二三氏の作を讀むに如くはなし。かゝれば其文は安らかにして毫も晦澁の跡なく讀了つて輕々に筆を着けたるやの感あれども氏が經營苦辛以て一家を爲したるは驚くべき事なり。氏がダビット、カッパーフィールドは概ね自己の經歷を記したるものなるが其中に曰く「余は一生涯に爲さんと試みしものは立派に爲さんと仝力を盡して是を試み又身を擲つて盡さんとせしものは最も潔く完成せんとせり、仝力を盡すべきものに片手を置く勿れ且何事にもあれ我仕事を愚にして等閑に附する勿れ=是れ余が常に服膺する金言なり」と。實に氏は此心をもて直進して縦令小品短文なりとも自ら許すにあらずんば世に出さず、勞心刻骨一字一句と雖ども自ら安んぜざれば錬磨千回百回に及ぶも倦まず。非凡の天質に加ふるに此苦辛勉勵を以てしたれば氏が名文學界の高位を占むるは元より當然にして氏は常に「猶ほ勵み猶ほ進まん」の語を口にしたりき。想起せば此金言は氏が初めて作りたる小品文の載りたるOld Monthly Magazineを携へ餘りの嬉しさに涙に暮れ曇りたる眼を怪しめられんとて市へも出ずウェストミンスター、ホールの段階を上下したる時より世界各國數百萬の人に好樂敬誨を與へし原泉たる筆を投じて著作室より直ちに旅したる悲しき日まで殆んど三十五年間腦裏に浸染したるものにてあらん。古今作者を見渡して氏ほど著作に心を用ひしはなく其腕能く成すべしと考ふるものは其仝力を盡してあくまでも完美を求めんとせり。而して自ら其地位を尊び其職業を重んじ終にチャーレス、ヂッ

ケンスの名をして十九世紀の光彩たらしめ衆人の畏敬讃嘆を博したり。誠や、此大名雷の如く響ける文學者は其初靴を磨き見守をせし幼チャーレスにてありき。

小說

○あるのん物語（大尼）　美妙齋・たより合譯

けれど明る日になるとおせなすの樣子が訝しく成ました。死んだ子を私の手からもぎ取るや否や野の方へと飛び出して其處で兩手で高く捧げ、「燒けた犧牲〳〵、神に差し上げる燒けた犧牲」とばかり言ッて叫んで居ました。が、直にまたすさまじく笑ひ出したその氣味わるさ。

更におせなすは聲を張り揚げ、「水…水…水を」と呼んでそれから駈け出しました――私も跡に就いて水と見える處に來たと見えて只有るところにおせなすは立ち止まり、何も無い處をさも水があるやうな躰で赤子を沐浴させる眞似をして居ました。で、低く笑ッてそして泣きながら、「御飲みよ、坊や、澤山御飲みよ」。

しかし、元より子は生きかへらぬ、それを見ては又泣き出しました、「あゝ水はすつかり洪水につひやされて仕舞ッた。思へば〳〵あのあさぢるが多分怨をかへしたのだらう」。そして又わらひましたが、我をわすれて自身の身躰を嚙みました。

あはてる私は抱き止め、すかしても更に埒が明きません、たゞ「水」とばかり言ッて居るだけで、咽喉の中でも。

それから一晝夜私に抱かれて居ましたが、おせなすは何も言はず、また人の見境もありません。で、椰子の木の下へ私は赤子を埋めましたが、しかしいぢらしさ、おせなすはそれとも知りません。

そして、あゝ何の不運！その次の日になると、にはかにおせなすの樣子が變になッて、とう〳〵私に抱かれたまゝ是もあへなくなりました！

木から落ちた猿の私。怨めしいのは私が世に生まれた日私がはぐゝまれた乳汁、私を產んだ父、そして私をこしらへた神。天地及び水、實にそれらすべて皆怨みの種でした。

それで、私はいきながらへて居るのですものを。

地を堀ッておせなすの亡骸を隱すときつく〳〵また神に怨みを言ひました。

掘る土は堅し、掘る道具は矢と私の指ばかり、はては指も損じて血が出ました。

わせなすを埋めてそのうるはしかつた顏に土をかける途端たちまち西風の急なのが吹いて來て雲もわつく湧き、そして畜生！雨が、水が、降つて來ました。

一滴しか、しかし私には飲めません。

墓の傍に坐つて靜に私は自身の死期を待ちました。

そしてそれ故、との懺悔を後世に殘すには岩にしるして彫り付けて置くのが一番と思ひ立ちました。

これが私わるのんと少女わせなすとの愛情の物語、及びその子の話です。子、名も有りません、兩親はそれを名で呼ぶよりは只自分たちの子とばかり言ひたかつた故。

其未來の愛情のかはらぬ夫婦、共に受ける運命はすべて一樣でありたいところの。

で、私は岩に斯う刻みました、「あゝめん」。

そして私は口の中にも始終「あゝめん」。

〇眞才子

麻溪居士

下卷

實に戀は浮世を渡る辛酸を人間が知り初める初歩です　（甲）

漸つとの思で私は畫師の家へ内弟子になりましたもの丶始め想像した如く唯繪を習ふばかりではありません。毎日家内の用を足して、まるで丁稚同樣な有樣です。然し叔父の家に居て嫌な學校の日課を座敷で下讀するよりは、臺處で飯を焚ながら畫を見て居る方が遙か愉快でありました。

私が其家へ來たのは丁度十三歳の時でしたが此時此繪師の家に十二歳になる娘がありました、其名は花と云ふのです。此娘の母親は三年前に死で今は繼母の手に育てられて居ます。繼母といふと何處でも其先妻の子を取扱ふのが宜しくない樣ですが、此娘の母親はそれ程でもありません。私の畫師は三十三歳ですが、元圓山派を少し習つて、夫から浮世繪歌川派に變つたのです。もとより浮世繪位で錦繪を書たり新聞紙の挿繪位ですから、家計は餘り豐と云ふ方では有ませんが、其娘に遊藝を習はせ學校へも通學させて、一ト通りの教育は授けて居ました。

此娘の容姿はどうでせう？——畫筆で引た柳の眉、朱で點た唇、父親が丹精して書いた畫が精となつて母の胎内に宿つたのと思はれる位、その上ポツタリした愛嬌が口元に溢れて居ます、餘り世間にあり觸た顏付ではなく、まづ萬人以上に

優れて居ます、ですから其両親の寵愛も――簪の花――強い風にも成べく當ない様な調子です。

此娘が學校へ行くにも三味線の稽古にも大概お供は私です、それで此娘の戸外の業は善かれ悪かれ皆な私に責任があるので、石に躓て衣服の膝を汚しても轉倒だ當人は叱れないで、お目玉を頂戴するのは私です、歸りが遲くなれば、道草を喰つて居た人は叱られないで連て來た者が惡くなるのです、ですが此娘は性質は温順なので、私の失策した時は何時も私を辨護して呉れたので、小供心にも「可愛らしいと」思ふ心は自と私の脳裏に染みて居ました、實に當然です此情の起るのは――いかめしい松の樹でも、柔しい春の風には、小枝を動かすではありませんか。一滴の露があれば、折られた花も蕾を開くでしやう。まして喜怒哀樂の辛苦になれない小供心ろ。一寸とした柔しい言葉も、他人から掛られた上は、總身に染渡るのは當然です。

私は十六になるまで、此繪師の處に居りました、此娘は十五です。此時に私は可なり繪も書け、一本立になつても隨分活計が立てられる様になりました。娘も人情の甘い辛いも知つて來て……學校の途中でやんちゃんを言た時分のお花では有ません。容姿は小供の時より、一層に美を加へて、大層人の目に付き、町内でも大評判される位になつたのです。ところが是迄、私と二人の生長の中に兄妹までとも行ませんが、互に親しくして居たものですから、決して「戀」だの「情」だのといふものに繋はれないでも、唯互に頼にして居た其心の裏の悲しさや苦しさを打明して話して見れば、其處に慕はしいといふ念は、必ず起るものです、そこで何か事が起つて、分離せねばならぬと云ふ事になれば、どんなに悲しいか、どんなにつらいか知れません。

此時此畫師の住で居る町の外れに、西鶴粋菴といふ人がありましたが、其子の桃太郎といふ者が文科大學を卒業したの付て、桃太郎の朋友で亦此花子が通學する高尚女學校の幹事から此花子を妻に迎へては……と申込んで來ました、是が去年の夏時分の事です。此西鶴といふのは此町でも有名な富家でありますし、其聟も文學士ですから慾に絆されたといふ理由でもありますまいが、私の師は自分の相續人に其親緣の男の子をさせて、花子を他家へ緣付け様と思つて、母親は一日娘を呼んで此事を話しました、勿論小座敷でのひそ〳〵話ですから私が聞知る理由は有ませんが、恰度其時私は次の間で、一心

に青年繪畫共進會へ出品する下畫を書て居ましたから、聞とわなしに……でも聽神經が鋭くあります。物柔なのは母親の聲、

✕「チお前、……お花……先方は此町でも指屈りの富豪者でもあり、其上に大學校とかを卒業して文學士とか云ふ立派な位を持てる御方だそうだから決してお前がお嫁に行ても困るといふ樣な家じやあるし、幹事さんも文學士や理學士は何樣世の中になつても「ツブシ」のきくもので決して食はぐりのないものだと平常おつしやツたてはないか、だから探しても此樣な緣談はありあしないから、お前あの家へお嫁になつては……どうだい

娘は何と返事をするか……耳は益々長くなります、兎の樣に、此時の心配は、作者の外は知りません。娘「……ハイ、氣のない返事です、母親は猶も、

✕「ハイじやお解らない……、そりやもう一生自分に連添ふ人だものお前のいやだと思ふ人には無理に緣組させても無汰だがね、……お前よく考へて御覽、世間の娘さん達は少しでも富豪者の所へ行うと思つて居る世の中に、此樣な緣談があつて斷るのはおかしいものだね、それもさ唯恥かしいからお前の口から、はつきり言れない事があるならば、私しには談してもいゝやね……ねお前

此時私は、もう筆も書けません、そつと立上つて覗きますと、娘の顏には一面の猩燕脂、鬢の後毛を耳の側へかき上た後は無言で、膝の上で糸屑を捻つて居ます

✕「得心ならはつきり左樣言ておくれ、西郷さんも頻りとせいておいでなさる樣だから……よ……何も恥かしい事はありあしない、お前の心が分らないで斷然した事を言てしまつて……後でどうだの斯うだの言ふ樣になつては誠に困るから……ね……お花、お前は得心だろうね

娘の頰には染出せし猩燕脂も消へて元の白薔薇——われ「ランカスタアー」の人は羨みました

娘「それでもお母さん……私は……私は

✕「エツ……何……なんだつて？

娘「何がつて……私はまだ

✕「まだ……なにがまだなんだい

娘「まだいけませんものを……お嫁にいくなんて……年が

母親は立腹顏です。言葉は此度は鋭く出ます。是迄は母親の政畧は說諭でしたが此度は寧ろ強迫主義です。

×「年が……年のいくかいかあいかは私が承知して居ます、西鶴さんも御承知です、年がいかないので縁談に早ければ私の方から斷ります、お前が其樣な事を言には及ません。

寄書

○君僕妾の文字用ふべからず

在鹿島　櫻山仕士

弟此頃女學雜誌第百七拾號瞥郁散士の文を拜讀したり曰妾字を用ゆべからずと如何にも賛成せり弟は萬事無稽者にて女稱のとは勿論男子の徐稱自稱さへ氣付かざりしが散士の文を見始めて嗚程然る可き事と考へたれば之と同時に散士の高智を假て弟も亦一ひ鳴らんとす日常們自稱に於て君僕妾の文字を用ゆべからず君と言ふ代りに兄と言ひ姉と言はん僕或は妾の代りに弟さし妹させん而して一層の徐讓を加へんには或は愛兄と呼び賢姉と呼び謙遜には愚弟と稱し愚妹と稱し其形容詞は如何なる文字を用ゆるも可ならん唯血統上の區別に於て己の兄弟を人に對して言ふときは舍兄舍弟と呼び其人に關する者は之を令兄令弟なり賢弟なり言はん通俗に用ゆる御舍兄御舍弟にても可なり斯の如く兄弟姉妹を基本とせんさらば語氣も温雅親密にして卿れず濟さず又理論上眞の君僕に非す眞の主婢に非るも人類は凡て兄弟姉妹たるなり而して眞の君は君と言ひ或は賢君なり明君なり徐稱を附し眞の僕ならは亦僕と言ひ親子たり兄弟たり姉妹たり夫婦たり夫妻たり主僕たり主婢たり師弟子たり各實際の分に於ける文字を用ひ徐謙遜には相當の形容詞を冠せん妾の分なくして妾と僞るを廢すると共に君に非る者は君と言はず僕に非る者は僕と言はず婢に非れば亦婢と言はず眞實の文字を用ひては如何願くは兄弟姉妹の御勘考を願ふ

○愉快

八王子　C. P

天氣清朗、空々一片の白朵、止むるなく、廣々茫々、吾人の精心は揚々として一雄飛せんさす、時に親しき友と杖を小丘に曳き臨望を縱ましにし、退きて鬱蒼たる樹陰に凉風を納る、嗚呼、徐ろに携ふる聖書を開き、神の深奧なる默示を味ふ。

○螢

牛込　藤田節雄

たまり江の濁りの松のしたれ枝の露にうつれる螢火のかげ

或人に送れる歌

手折るべき月の桂もあるものをなさけあまりて君ぞ戀しき

開書

○演説家、新聞記者諸先生に參らす

斯く迄で暑き折柄一層御勉強の御事去さ國事を思ひての御折詰さ承はれば尙更御心地如何あらんかと案じ上まし特に斯る酷暑の砌一生懸命になりて御演説などありてはヨット大切なる腦が破裂などはせぬか私しの家に或る硝子瓶を温ため候矢張り冬と同じき積りにて大相に火を燃やし候ところ乍ち破裂いたしぬお醫者樣に伺ひまーた處ろ之は暑いときに一圖に熱くした故だと承はりました夫故あなた方にも何卒其樣な事のなきやう御用心專一と存じ候、條約改正さか云ども西洋でも矢張り夏休みのあるとゆへ夏休中は別に誂料も拙取らす其儘にて候とかあなた方も少はお休みなされ秋に入り冷しき比より又々御演説遊ばされては何如ん、次に新聞記者先生達は年中いつもく休みなく御勉強なし下さるとゆへ切めて避暑の時でもゆるりと御休息なされては何如にや何れ夏中は新聞も賣れ申すまじお休みには屈強の時と存じ侍る特に新聞記者は平生忙がはしきをもて讀書する暇まなしとか申し西洋にても記者先生は大抵當世の學問に後るゝ習ひのよし夫故へ夏休中は山にでも入りて勉學し漸やく世人に追付玉ふ趣き傳聞いたし候先生方もちと此邊の御工夫ありて秋以後一層の御新論を與へ玉ふとさなされては何如ん、人世逆旅の如し此の清風を何如にせんさか申すよし山人は余程と都の方々をお可愛相に思ふものならん妾は何分にも先生方のお身が案せられ若し先生方が破裂したりトロケたり腐つたりなど成すつては大變と存じ拙き筆もてあらく申上ぐれかしく

信州の山婆　ときら

新報

○「日本」の女子教育

「日本」は嚮に、

第一　日本に於て女子教育の目的は女子をして何程の智識技能を得せしむるに在るべき歟

第二　日本の女子教育は學藝の外に尙ほ西洋流の交際を學はしむるの必要ある歟

第三　女子に學はしむるの修身科は日本在來の女大學流の精神にて不充分なるや若し不充分なりさせは如何なる主義に據るべき歟

第四　女子に音樂を學はしむるは單に一家の樂に止むる歟或は尙ほ社交上の必要ありや

第五　小說は妙齡女子の好て讀む所のものなり其の教育上の作用如何

右五問を揭げて府下の各教育者、及び地方の諸師範校長に答論を求めたり、其答文追々さ紙上に現はるゝを見る、今日に於ては未だ左したる名論も見えざれど此後必ず卓論の出んかと甚はだ相待たるゝ也。

Digitized by Google
Original from COLUMBIA UNIVERSITY

同しく「日本」新聞に、獨逸國に於ては近來女子教育の事大ひに人の注目する所ろとなり學問したる少女は嫁入も六かしき傾きとなりて云々とあり此は何人より聞かれたるかを知らねど事實の大ひに誤まりたるもの也、獨逸國に於ては近頃ろ女子に高等教育を授くべしとの所論漸く高くなり、數千の母は連署して之を文部大臣に請願するに至りしほど也、固より獨逸國は女子の高等教育ヿ就て歐洲文明諸邦中に尤も後れたる國なり、然るに時勢尚ほ如此し、以て他を推知すべし。

○教育の眞義

教育とは人性を開發するもの也、故に成るべく其の高等ならんとを欲す、高等の教育は即はち人性を尤も高等の地に進むるもの也、誰れか人類の高等に到るとを好まざるものあらん、專制家か、秦の始皇か、武斷者か、ナポーレオンか、貴族的の人か、奴隷贊成家にあらずんば決して之を好まざるとなけん、左らば何を以て人の高等教育を嫌はざるや。　高等教育固より願ふべし、たゞ金力と、躰力と、國力とに賴りて左樣に急激に進みがたきのみ、然れども進まんと欲するの念は萬人皆な之を確抱せざる可らず、但だ然らざるものは一種の保守論者あるのみ。而して男子の人にてある如く女子も亦た人也、女子の成るべく高等に發達せんとを欲せば、亦た之を高等に開發せんとするの教育は無論必要にあらずや。　教育は人間を愛せざる可らず、魂しひを愛せざる可らず、公平ならざる可らず、平民的ならざる可らず、改進者ならざる可らず。

○美人の形容

畢して「文庫」の紙上に美人の形容文精々として出で來れり、然れども皆な人形を寫したる如し、實に生きたる美人を寫せりとは思はれず、抑そも美人の美は只だ其顔にありや、否な顔の耳目鼻口のみにあらじ尤も多く其の相容（エキスプレツシヨン）にあるにあらずや、實に相容のみならず更に其全体の風姿にあるにあらずや、實に風姿のみならず、更に其全身躰の活動する所ろにあるにあらずや、苟くも美人を形容せんと欲するの文人は其粹を刺すへし、外形に眞似るとは人形師にても出來る也。

○教育海旋風

教育社會に最大必要の本理あり、即はち多少の誤謬欠點あるに拘らす、多年の間必らず一を以て貫ぬくこと確堅是れ也、然れども止むなくんば此事も亦望む可らざるもの歟、教育時論が近々小學令に改正あらんとする由を論じて、明治五年以來文部長官と教育制との相互變化したるとを表示したる、實に左の如し、

發布年月	法令	就任年月	文部長官
明治五年八月	學制	明治四年七月	文部卿　大木喬任
		同六年	文部省三等出仕　田中不二麿
明治十二年七月	教育令	同	參議　木戸孝允
明治十三年十二月	改正教育令	同	文部大輔　田中不二麿
明治十八年八月	改正教育令	同十一年	陸軍中將　西郷從道
明治十九年四月	小學令	同	文部大輔　田中不二麿
		同十二年	參議　寺島宗則
		同十三年	文部卿　河野敏鎌
		同十四年	議官　福岡孝悌
		同十七年	參議　大木喬任
		同十八年十二月	文部大臣　森有禮
		同廿二年四月	文部大臣　榎本武揚

○青年の英氣到る處ろにあり

吾人は今に於て尤も厚く各青年會に注目す、而して青年會の運動は到る處ろに快活雄壯なり、去二十六日の中外電報に云く、

本月十六日發兌の眞宗青年傳道會雜誌の首欵に譏持會、土木工事、布教者、大學林等の目を掲て一々宗內の弊風を痛論し大に宗會の無氣力を攻擊したるより會衆中宮本惠淳西川均等諸氏十六名（會衆は四十名なり）は大に憤激し斯る無根の文字を臚列して一山の宗安を害する傳道會の所爲こそ不都合なれとて即日本山執行長に向て「第一傳道會係員を處分する事、第二傳道會を本山境內より退去せしむる事、第三門末一般へ諭達して傳道會雜誌の購讀を禁ずる事」の三ヶ條を請求したり因て執行長は直に傳道會の取締を召喚し一應の取調を爲したるが傳道會の方にてはナカ〳〵屈する色なく速に從來使用したる大師堂下の建物を明渡して下京區東中筋花屋町下る十九番戸に移轉し尚ほ若し當山に於て雜誌購讀の禁令を發するに於ては當會に於ても即日號外を發し本山內幕の秘密を悉く訐發して一宗の輿論に訴ふべきか如何と迫りたるにぞ本山にても大に持てあまし終に內使を送り第三の箇條は之を實行せざるにより號外發行の事も思ひ止るべしと宥め僅に破裂を防ぐとを得て無事に納りたる由併し右十六名の會衆は之れが爲めに漸く傳道會を惡み一兩日前傳道會へ向て退會の申込みを爲したる由なり。

吾人は神道にも、佛門にも、政海にも、文學社界にも、總べて青年の英氣の侵入する強烈ならんとを祈る、人早や老ひぬれば如何で復た生るゝを得んや、將來の改革は老人隱れ少年出るの時に在り。

Digitized by Google　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

○才の爲に罪を寛假する勿れ

苟くも才を惜まんとせば須からく先ず才の爲めに罪を寛假する勿れ、古來才人の才を重んじて其の瑕瑾を問はざりしが故に抑そも幾干の英才か壓ば安んじて不正の事に放蕩したる、然も啻に之のみならず、凡う俊爽の士は必らず非凡の行ひあり小瑾の不謹先づ存して後ち初めて大功あるを得るか如く誤解する者すら多きに至る、悉とく是れ初め才の爲めに罪を許したる者の失策に出でざるなし。昔し孔明涙を揮つて馬謖を切る、眞との英雄の人世を理する當に如此くなるべし、彼の優柔として才を惜むと云ふものは、實は眞正に才を惜しむものに非ず。

○小量局促

未だ政黨的に喧しましく言はん必要あらず、然るに近來政黨的の喧嘩の何んぞまずく激烈なるや、此邊にて進まば人々多分は狂氣にでも爲らんずらん、吾人は太たく心配して止まざるもの也、新聞揭報じて云く、

北陸地方に於て大同派が改進黨を敵視し殊にある地方の如きは婦幼田夫に至るまで黨派を分ちて甚だしきは大同橋、改進橋など同じ場所に二箇の橋梁を設け通路を別にするに至りたりとは兼て聞く處なるが爾來は兩黨軋轢日日に其極に向へるのみにて現に此頃の如きは富山縣下婦負郡古里村の通明小學校生徒にまでもこの黨派の分裂を來し遂に大同派の生徒は改進派の生徒と肩を並べて授業するを屑しとせずとて校長に迫り黨員一同退校を申し込むに至り百方說諭を受けて漸く鎭靜に及びたるよし如何なる前世の約束にやかくまで敵視するの甚だしきとは……

吾人笑はんとして、亦實に泣かざるを得ず。

○學者風の洋行人に忠告す

徴兵を逃れてサンフランシスコに行くもの、百姓かせぎを目的としてハワイに行く仲間は固より格外なり、苟くも紳士とか學者とか云ひて洋行し、彼地の景況を調査すなど大言せらるゝものは、其洋行前に於て先づ篤と考へられたき者也、吾人は東京に居ると既に十餘年なり、然るに東京の事情を知ると未だ思ふやうにあらず、然るに風俗言語習慣の全く變はり居る數千萬里外の外國に渡り僅々二三ケ月間の視察によりて大相の報告を爲さるゝは抱腹の至りなり、然るに啻に之のみならず、ロンドンの下宿屋で英語を習らい乍ら、國會の景況を見大政事家の人物を評す、と云ふに至つては噴飯するも尙ほ足らず、洋行は金の掛るものにて且時間も仲々に損すると多し、故に金箔主義ペンキ政略にてあらざる以上は、出發前に於て深く考慮せられたきもの也。先づ基督教會に二三年も出入し、在留の外人と暫ば談話し、彼國の繁昌記統計表及び特に小說を讀むと多ければ、今の新聞紙に見ゆる位の通信は神田の書斎にても出來る也、諺に云く百聞は一見に如かずと、即はち百聞したる後にあらずんば一見の効あるを知らず、初より何も知らず、都見物するもの何事か見得ん。讀者がこゝの道理を承知し置かるゝは洋行者の馬鹿氣たる報告を喜ばざる元因となり、洋行者の馬鹿氣たる報告を喜こばざるは無益の洋行を止むるとゝなり、無益の洋行を止むるとは甚はだ濫輸出を防ぐとゝなる、濫輸出は金にしても人物にしても今に於て實に好ましからぬもの也。

○特に其土産に困却す

學者風の洋行人に殘念なるは之のみにあらず、特に其土產に於て困却する也、吾人甚はだ土產を貰うとを好む、其情の濃もると深ければなり、然れども近頃の洋行者の家づとに至りては甚はだ有がたく思はざる也、彼の諸君外國に在りては碌々話しも出來ず、宗教を信ぜざれば立派なる家族とも交際せず、左したる人物ならねば上流士人とも往來せず、只僅かに下等社會の實相を見、上流社會の幻影を遠望したるのみ、蓋しシャクに障りたると多かりしならん、故に其歸國し來るや乍ち國粹保存論者となる也、斯る錦衣の人は願くは夜歸られたし、吾人歡びて迎ふるを得ず。

○印度に於ける女學運動

印度には漸やく獨立、眞理、一神、等の感謝すべき現象起り來る、中に就て其女學上の運動に至りては近來特に有力なり。彼のラマバイは一萬一千八百八十六弗の正金、四千一百四十六弗の約束、及び一萬弗の期望を以て、印度に歸り直ちにシヤラダ、シヤダンを開き、彼の尤も憫れむ可き幼年寡婦を主として教育し、英語、マラシ語、ゲビラ語、サンスクリット語を教授す、而して米國に於ては數十のラマバイ協會ありて尙ほ遠く之を助けんとせり。又爰に元とカナダ領の知事たりし人の細君ダツフエリン夫人の盡力せられたるにより、印度國に於ける女醫の學は近頃ろ益す進步す、即はちプンジヤブ協會と云へるはピクトリア校を助けて大に女子醫學生の養成に盡力し、ラツクナウにては去年十九名の女子醫學を學びたるが其の中ち四人はブラマ宗の子なり。其他マドラス大學校に於てはチンネペレーの土人にして基督教を信じたるものゝ娘五名入學し、ボンベイ大學校

Digitized by Google　　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

に於ては今年十三人の在留洋人の娘入學したる外に三人の土人の女子も入學したり。又ブラマ宗の一婦人ブンヂタ、ズムナバイは兼て梵語に通じ且よく詩を作るが此頃ろザムナツガーに於て一の婦人會を起したり。又スリマチ、ハリ、デビさ云へる婦人は熱心に幼稚園の事を主張し、近頃ろタ、アリユ、イ、チフリアンさ云へる一書を著はして淡汨有力に幼稚園の利を説き廣く散布したり。同女史は亦た一の女學雜誌を創めて印度語及びアルド語の兩つにて之を記載し自から編輯す、而して此は數ヶ月間に起りたる印度開國後婦人雜誌の第二なるもの也。

○赤十字、クラ、バートン

バーデンに於てありし萬國赤十字社總會の折りの石黒氏が記錄にも見えし、彼の米國赤十字支社長たるクラ、バートン女史は老餘病氣重きよし承はりたるに、近來頗ぶる壯健の由、吾人甚はだ祝す。ヲハヨーの洪水の時、ミシガンの大火の時、チヤーレストンの地震の時、テキサスの干魃の時、マウントバーノンの暴風の時、特に今回のヂヨンストンの大水害の時に、女使が慈善事業常に著じるし、蓋し女史の到る所ろ大率ね慈善の跡を殘さゞるなし、米國赤十字社の標言に云く、戰爭傳染疫病其他の國害ヱ對して助けんさ女史は眞に其如くに實行せらるゝの人也。

○青山御所祗候　青山御所勤務免せられ更に青山御所祗候四人被仰付奏任の待遇さする旨去る廿七日宮內大臣より皇太后宮大夫へ達せられたるが祗候を仰付られたる人々は左の如し

從二位子爵慈光寺有仲　正四位子爵堤功長　正五位子爵野宮定穀
從四位園基祥

死亡

○津田梅嬢　同女史は今の大山伯夫人等と共に早くより米國に留學せられたるが明治十五年歸朝ありしのち下田歌子氏の女學校及び明治女學校にて教授し後ちまた華族女學校の教授となり頗ぶる教育に熱心なる聞えありしが此度在官のまゝ復たび米國に留學し一層深く學ばるゝよしにて二十五日出發せられたり。

○獨立女學校　屢ば記載したる稲田、加藤、水野三女史の設立せられんさする獨立女學校は大ひに諸貴婦人の贊成を得特に榊山子爵夫人の如きは非常の盡力を與へらるゝ由にて此頃すでに建築に着手したれば夏休後よりいよく開校の運びに至るべしと云ふ。

○愛生社改選役員　海軍々人の夫人方の設立に係る愛生社に於ては本支社役員を改選したるに東京本社長高木富子、副社長實吉直子、幹事河村裕子、同加賀美繁子横須賀支社長矢野石子、幹事木村兎子、同加藤茂子、吳支社長豐住好子、幹事鶴川久子、同芳村希以子、佐世保支社長前田稲子、幹事鈴木米子、同村瀬潤子が當選せりさ

○露國皇后宮命名日　本日は露國皇后宮の命名日に相當するを以て本邦駐在の同國公使館に於ては同日午後より在京の同國人を招待して宴會を開く由

○赤十字社の病室新築　日本赤十字社にては豫て同社病院の爲め青山御料地へ煉瓦二階造の家屋を新築する計畫にて目下已に地形中なるが新築の同病室は獨國伯林府大病院に摸造する由竣工は來二十三年夏季にして工費は十萬餘圓なりと。

○松山女學校　伊豫國松山女學校は從來女教師のみが教授し入浴に行くにも生徒を區分し漸次受持教師が伴ひ行き又た要用ありて外出するも必らず親戚或ひは懇親なる人の保證を要し餘程嚴重になし居るが爲め不品行の噂なく追ひく盛大に至るべき景況なるが今度其規摸を大にし義捐金なも募らんさの企てあり。

○愛友女子手藝學校　西京下京區富小路通四條下る三崎作兵衛氏は夙に新奇の玩弄品を製して海外へ輸出し居りしが今度洛東圓山に愛友女子手藝學校さいふを設け數日前より授業を始めたり其目的は貧困孤獨の女子に玩弄品の製作方を教授し獨立の生計を立てしむるにありと云ふ

外報

○ウエルスレー大學　加藤錦嬢が在學せし彼の米國ウエルスレー大學にては常期に於て七十四人の卒業生ありし由。

○洗濯女會　米國リツトルロツク印度人中の洗濯女等萬一の時に相助けんさ題號の如き會を設けたる由。

○米國婦人禁酒會　同會の第十七紀年大會は來る十一月八日より十二日迄同國シカゴ府第一コングレゲーション會堂に於て開くよし。

看病婦學校生徒募集廣告

●本校學年ハ明治二十二年十月七日ヨリ同二十三年六月下旬ヲ以テ終ル●第一期ノ始ニ有ラザレバ入學ヲ許サズ故ニ九月一日迄ニ必ズ申込ヲ爲ス可シ●教授法ハ講議口授臨床講議等看病ノ爲メ必用ノ事ハ洩レナク教授ス●毎月食費金貳圓ノ外要セズ但シ炭油部屋教科書病室用服等總テ本校ヨリ給ス●學則校則入學志願手續書等望ノ方ヘハ相渡ス可シ若郵便ニテ申込アラバ直ニ送附ス

京都烏丸通京都看病婦學校

交詢案內

（催促する勿れ 郵券十錢送れ 委細に申來れ）

●雇はれたき方（乙）

六	奉公	地方師範學校卒業生にて學資に困むに就ては可成西洋人宅にて乘人協力勉學旁雇はれたき二娘より無給にて何地にてもよろし
七	裁縫	年齡廿三にして家內の手助けとならんが爲め內職に裁縫に雇はれ度き者あり華族樣か町家ならば大家のかたき內にて築地邊ならば通いても宜しとのと其他ハンケチーフのふち縫の如きにても宜し
十三	教師	栃木縣女子師範學校の卒業生にて何處かの學校或は他の御內にても教授に雇はれたきものあり可成くは麴町か駿河台邊を望む
一九	召使	裁縫の教授を專にし其他女子學校等監督兼留守居樣の者に雇はれたし
二四	奉公	年齡廿二才にして一と通り裁縫もいたし氣輕の生れつきにて華族樣か中以上の官員方へ中働きに奉公いたし度し給金は壹圓以上に願ひたし
二五	裁縫	裁縫は重もに婦人洋服にて和服にも巧なり學校若しくは華族其他高貴の御內に教師に雇はれたし
二八	奉公	普通小學科卒業の者にて（年齡二十二才）産婆業を營まるゝ基督信徒の家に無給にて雇はれ余暇に産婆術を學び度ものあり
二九	奉公	年齡十四歲にて基督教信徒の家（可成は西洋人）に雇はれ度ものあり尤も普通食料小使仕着等一切持參致すに付き毎日四五時間英語學の修業致したし
三〇	通辨	年齡廿四歲にて貴婦人方の英語の通辨として雇はれ度ものあり
三一	奉公	廿一二才のキリスト信者にて裁縫を教へ家內の手助けをなし四時間通學を爲し得る家に無給にて雇はれたきものあり

東洋英和女學校計畫一斑

當校暑休ノ爲六月廿九日閉校來ル九月七日開校寄宿生ハ當日入舍通學新入生ハ同九日入校アルベシ

當校ハ我日本ノ婦女子ニ更ニ高尚完全ナル教育ヲ授ケンカ爲メ從來ノ普通科學期ニ更ニ二年ヲ加ヘ高等科ヲ設ケ特別ニ數學簿記和漢文學地理歷史心理學教育學等ヲ教授シ英語科中ノ數學ハ之ヲ止メ其時間ハ英文學及ヒ作文ニ用ユベシ此改正ハ文部省教員學力檢定試驗ヲ受ケ教員免狀ヲ得ント欲スル者ニハ殊ニ便利ニシテ甚好都合ナルベシ

所望者多クシテ一級ヲ編成スルニ足レバ別ニ彩色及繡鳥ノ科ヲ設クヘシ

且教師ヲ增加シテ充分適當ナル教員ヲ持續センヿヲ勤ムベシ

又九月ニハ新ニ科程規則ヲ定メ上梓シテ配布スベシ

現今ノ規則書ヲ望ム者又其他照會ヲ欲スル者ハ左ノ處ニ書翰ヲ投シ或ハ自ラ御出頭アリタシ

明治廿二年六月

麻布東鳥居坂町十四番地

東洋英和女學校

●女生徒募集 定則試驗結了各級通學生寄宿生許入學

駿河臺袋町十六番地 興風女學校

女生徒募集公告

本校ハ九月十六日始業豫科一年生ヨリ各級入學ヲ許ス志願者ハ入舍學共九月十日迄ニ申込ベシ十二日ヨリ三日間入學試驗ヲ執行規則書ハ郵券二錢ニテ送付ス

明治二十二年七月

京都市今出川通寺町西入

同志社女學校

私立 **明治女學校** 新入生徒 **募集**

本學年試驗相畢り本科卒業生一名漢學科卒業生七名有之候○右に付最下級及び欠員ある級に對し新入生徒を募集す○規則書塾舍心得書入用の方は郵券二錢封入申込あらん事を請ふ

私立 **明治女學校** 高等科自由科 **新設**

本校開始后既に九年定めの如く第一回本科卒業生を得たるに付兼て預告したる如く今后新に高等科を設け且つ別に自由科を添ゆ○高等科一日二時間授業三年にして科目及受持講師大畧如左

日本歷史、心理學、倫理學　植村正久
歐米古今代史　木村熊二
生物學　米國技藝士　内村鑑三
理化天文學　米國理學士　木村駿吉
經濟學　金谷昭
英文學　未定
社會學　明田三郎
支那歷史、日本文學、教育學（未確定）　巖本善治

之を正科とし別に自由科を置き哲學、數學、獨逸語學、比較宗教學、家政學、音樂、書學、を教授し望の者に自由受業せしめ且つ撰科生には右正科別科の内三四を撰み學ぶ事を得せしむ

右高等科有志の諸君は八月二十五日迄に申込あるべし凡そ本校普通科五年修業の學力に相當するものは十九名に至る迄で入校を許す

私立 **明治女學校** 文藝講話 **預告**

次學年の秋を以て始め時々文學々術上の大家に請ふて數回連續の講話會を開き廣く來聽を許して少さか文藝女學の普及に一助せんと欲す

東京飯田町三丁目卅二番地
九段坂上燈臺屹立する所ろ　私立 **明治女學校**

發兌

七月。六日　十三日　二十日　廿七日
八月。三日　十日　十七日　廿四日　卅一日
九月。七日　十四日　廿一日　廿八日
十月。五日　十二日　十九日　廿六日

定價

一册。六錢　郵税。一錢（但府内無郵税）
十册。五十八錢郵税。十錢（同前）
半年分　一圓四十三錢　府外は　一圓六十九錢
一年分　二圓六十錢　府外は　三圓十二錢

廣告

特別廣告は婦女に關する協會會合等の記録を揭ぐるものにて一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を兼する係に右雜誌十部の注文を要し以上半頁分毎に十部府の割合と定む

一行　一回（廿七字詰）前金拾錢
同　三回以上　一割引
同　六回以上　二割引
十行以上一割引。二十行以上二割引。四十行以上三割引。但し不道德なる事物の廣告は謝絕す
有益なる事物の廣告は社議の上無代價にて引受く女學關係の書籍は一部の寄送を乞ひ相當の廣告をなし且つ本誌に批評すべし

WOMAN'S MAGAZINE.

"JOGAKU ZASSHI."

Price 6 *sen*. By post *yen* 1.69 six months, *yen* 3.12 per annum, in advance.
Edited and Published by Y. H. Iwamoto, at The Jogaku Zasshi Office, No. 8 HIYOSHICHŌ, Kyobashiku, Tôkyô, Japan.

女學雜誌賣捌所

東京京橋區彌左衛門町巖々堂○同芝西久保櫻川町萬春堂○同神田區雉子町團々社支店○同神田區佐柄木町東海堂○同日本橋區新葭町良明堂○同京橋區木挽町壹丁目萬字堂○同本郷區元富士町盛春堂○同本郷區春木町二丁目解明堂○同本郷四丁目文盛堂○橫濱住吉町角田屋貞○同本田町三丁目萬字堂○同日月堂○同本町六丁目日の出屋○京都四條通小橋西へ入澤集光堂○同三條通東洞院西へ入クリスチアンボード○大坂備後町四丁目岡島支店○仙臺國分町十五番地伊勢安雜誌部○宮城縣仙臺大町木村文助○尾張國名古屋本町石版社○出雲國松江新町盛進堂○廣島縣大手町一丁目早速社○長崎酒屋町虎與號○江州彦根西內大工町新々堂○相州小田原緑町石壽堂○上州高崎田町煥乎堂○土佐國高知本町三丁目樂園堂○熊本文明堂

明治二十二年八月一日印刷
明治二十二年八月三日出版

發行所　東京京橋區日吉町八番地　**女學雜誌社**

編輯兼發行者　東京京橋區日吉町八番地寄留　巖本善治

印刷者　東京芝區源助町十一番地寄留　森田豐